
薬草 8 G

草木 刈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薬草8G

【Nコード】

N0018U

【作者名】

草木刈

【あらすじ】

ぽーっとした感じの地味な女の子が、『ドラゴンクエスト3』そして伝説へ…』のアリアハン大陸をあっちこっち旅してまわります。

その1

……なさい。

……起きなさい。

枕もとで母親の声がした。

「うーん、もうちょっと寝かせてよ」

「さっさと起きなさい」

「あと五分だけ――」

「さっさと起きなさいったらッ！」

それまでの猫なで声が一変、容赦なく掛け布団を引っぺがされたかと思うと、まばゆい朝の光が容赦なくラミーを照らしだした。

「ま、まぶしい……」

「十六歳にもなって親に起こされるなんて、恥ずかしいと思わないの？ まったく」

腰に手を当てる母親が仁王立ちしている。

パジャマ姿のラミーは寝ぼけまなこでこしこし目を擦ると、ふわあとの気の抜けたあくびをして両腕を伸ばした。

「よく寝たあ」

「そりゃあ、あんだけ寝たら十分でしょうね。若いうちからあんまり寝すぎると、今に目ん玉が腐っちゃうんだから」

「へーい」

女の子とも思えないモノグサな返事をして、ベッドを抜けだした。スリッパをはいて食堂の方へふらふら歩いてゆく。今日の朝ご飯は、カブと葉菜のスープだ。

「パンは？」

「食堂のテーブルの上よ」

「うへ、不味そうなパン……」

食卓の上にあるライ麦パンは、窯から出されて数時間は経っているのか、冷えてかちかちになっている。

ラミーは横面をうかべると、こん棒並みに固くなったパンをもそもそ咀嚼した。

「このパン、ふすま多すぎ」

「文句言わないの。近ごろは、なかなか作物が採れないんだから」「むー」とラミーは膨れっ面をする。

この頃は、城下町の近くでも、よくモンスターが出没するようになった。

幸いなことに、城壁を越えて襲ってくることはほとんどないけれど、一步城門を出ると危険なモンスターがあちこち徘徊している。

そのため、昔のように気軽に野良仕事を行うわけにもいかず、アリアハン国の耕作面積は、バラモス出現以前に比べると四分の一程度にまで縮小してしまっている。

「ごちそうさまでした」

食事を終え、ラミーはナプキンで口を拭いた。ぜんぜん食べた気がしなかったが、一応、腹は膨れたのでよしとした。

「ご飯が済んだら、あんたにちょっと頼みたい仕事があるんだけど」

「えー、わたし忙しいんだけど」

「バカおっしやい。年頃の娘が家でごろごろして、何が忙しいって言うの？」

「それは、その……」

母親の容赦ない指摘に、ラミーはたじたじになる。

実際、日がな一日、家にこもっているラミーは、暇人以外の何者でもない。

家に1Gもお金を入れることもなく、食っちゃ寝の自堕落な生活を送っているラミーは、近所からも白い目で見られていた。

「分かっていると思うけど、お母さんね、あんたをこのまま家に置いておく気はないから」

「えっ？」

「当然でしょ。今のあんたはただの穀潰しよ、ご・く・つ・ぶ・し！」

「穀潰し……」

実の娘に向かって、それはいくらなんでもひどすぎる。

ラミーはむっとして反論しようとしたが、うまい反論の言葉が見つからないので諦めてふて腐れた。基本、口げんかは苦手だ。

「ほら、また寝に戻ろうとしないの。こっちきて、ここに座りなさい。いい？ お母さんね、あんたのためを思って、仕事を探してきてあげたの。これを機に社会復帰しなさい」

「余計なお世話だよ」

「バカ！ こんな生活がずっと続くと思ってたら大間違いだからね！ 今はよくても、この先ずっとお母さんが居ると思わないでよ。」

お母さんが死んだら、あんたは一人ぼっちなんだからね。そうしたらどうやって生きてくつもりなの？ 物乞いでもするの？」

「そうなたらお金持ちの男と結婚するよ」

「この大バカッ！」

手のひらが飛んできた、と思った瞬間、ぱあんと小気味よい音がして、頬に痛みが走った。

平手打ちされたのだ。

いつになく真剣な母親の態度に、ラミーは頬を押さえながら目をまるくした。

いつもならたらたら小言を連ねて、それで満足して諦めるのに、今朝にかぎってやけに絡んでくる。なんだか雲行きが剣呑だ。

「レーベ村のバッドンさん、知ってるでしょ。道具屋のご主人の」

「あー、バッドンおじさんね」

バッドンは、亡くなった父親の古い友人だ。以前はよくアリアハンの城下町まで遊びに来てくれたが、バラモスの侵攻が激しさを増した最近は一、二回、買いつけ旅行のついでに顔を出すくらいだ。

「バッドンさんがね、道具屋の店員としてあんたを一ヶ月間雇って

くれるって言うの」

「ふうん。物好きだね」

母親の話によると、なんでも店員が一ヶ月ほど休養するので、人手が足りないらしい。そこで旧友の娘であるラミーに期間限定で手伝って貰えないか、との打診があったのだ。

「お母さんがちゃんと返事出しておいたからね。世間知らずな不束者の娘ですが、なにとぞよろしくお願いしますって」

「えーっ！　なんで勝手にやんの？」

横暴だ、とラミーは口を尖らせて抗議した。これでは単なる丁稚奉公である。

「当たり前でしょ。こんなチャンス、滅多にないんだからね。あんたみたいなぐーたら娘は、身をもってバッドンさんに商売の厳しさを叩きこまれてきなさい。その方があんたのためになるんだから」

「そ、そんなあ……」

餞別として50Gを渡されると、全部終わるまでは家に戻ってくるな、と釘を刺され、家からほっぽり出されたのだった。

×

（うつ、薄情者め）

母親に対する恨み辛みを吐きながら、ラミーは荷袋を肩に担いで、城下町の四つ辻に立ち尽くした。

袋の中には替えの下着やその他細々とした日用品、それに虎の子の50Gが乱雑に詰めこんである。

旅立ちの仕度をしている最中は半信半疑だったが、こうして一人家から離れると、この信じがたい現実を受け入れざるを得なくなる。

（この先、どうしょ？）

街角で音楽を奏でる辻音楽師の前で演奏に耳を傾けながら、ラミ

ーはとつくりと思案した。

（まずは誰かにレーベ村への行き方を訊くべきなんだろうけど……）
ラミーはぐるりと往来を見わたした。

かれこれ一年近く、家にこもりっきりの生活を送ってきたので、他人にどう接したらいいのか分からない。道ゆく通行人は、みんなラミーに無関心で心細かった。

（ああ、だめだわたし。対人能力さがっちゃってる）

誰かに話す予行練習をするべく、路地裏でシミュレーションを重ねるが、いざ本番となると声が震えて上手く行かない。道ゆく人に不審がられて、かあつと頬が熱くなる。気まずい空気に耐えかねて、そのまま逃げてしまった。

「うっ……」

自分の不甲斐なさに、家を出て早々打ちのめされた。

お昼頃になると、すっかり他人に話しかける氣力をなくしてしまい、ラミーは路地裏の隅っこに坐りこんでしまった。

旅立ちの前に家の台所からくすねてきたかちチーズを齧った。朝から歩き詰めで、ひどく腹ぺこだったから、チーズでもご馳走だった。

「このチーズ固すぎね」

爆弾岩のような形をしたチーズを食べ、途方に暮れて黄昏れていると、見覚えのある少年がラミーの前を通りかかった。

「あっ」

と立ちあがって声をだすと、向こうもこっちに気づいたのか、にこやかな笑みをうかべて歩み寄ってきた。

「やあ、こんにちは」

「あ、えと……」

今日初めて相手から話しかけてきてくれた。ここで無言になったら台無しだ。

なけなしの勇氣を振り絞って声を出した。

「こ、こんにちは」

口ごもって「ち」が「ぢ」になる。

頬が赤くなるのが自分でも分かる。母親相手だといくらでもぞんざいな態度を取れるのに、他人相手となるとこうなのだ。

「キミ、どこかで会ったことあるよね。僕んちの近くに住んでる娘だよ」

「あ、ハイ」

ラミーは俯いて返事をする。

少年はオルテガさんちの子だ。名前は忘れてしまったけれど、勇者オルテガの血を継ぐ一粒種、とアリアハンの市民から噂されているのを何度か耳にしたことがある。

つまりは未来の勇者候補だ。

魔王に狙われるのを防ぐため、とかで、少年の名前は誰も口にしない。だからラミーも彼の名を知らなかった。

「思いだした、ラミーさんだよ」

「あ、ハイ」

しゃべるたび、何故か言葉の最初に「あ」がついてしまう。長年、他人と接してないと、どうしてもそうなるのだ。

「こんなとこに座って、どうしたの？」

「あ、あの、レーベ村へ行きたいです……けど……その、道とか知らなくて……あと、魔物とか出るらしいんで、困ってて」

しどろもどろで説明した。

対人スキルが低下しているところへ、自分とおなじ年頃の精悍な少年が相手である。ましてや彼は時期勇者と目されている人物だ。

恥ずかしがることなく、この場に踏みとどまって居られるのが、ラミーからすると奇跡なのだった。

（たぶん、彼の目つきのおかげだ）

少年の黒々とした瞳は、意志の強さだけではなく、他人を慈しむような輝きに満ちあふれている。こんな優しい目つきをした人と会ったのは生まれて初めてだった。

その柔らかな目でじっと見つめられると、不思議と恐怖が薄らいで

ゆくのを感じた。

「城の外へ出るのなら、ルイーダの酒場に行ってみるといいよ」

「ルイーダ？」

「腕に自信のある冒険者たちが集まる場所らしいんだ。旅行者は、みんなそこで護衛を雇うんだって」

「ふうん」とラミーはうなづく。

「僕も行ったことないんだけどね、ほら、まだ未成年だからさ」

「そうなの？」

「うん、明日でちょうど十六になるんだ」

というとき明日が誕生日なのか、とラミーは内心つぶやく。

アリアハンでの成人は十六歳だ。当然、その歳になるまでは酒場への出入りは固く禁じられている。

「お誕生日おめでとう」

「ありがと」と少年は照れ笑いをした。

少年の屈託のない笑顔を見ると、無性に誕生日の贈り物をしなくなる。

が、家を追い出された身のラミーには、少年に渡せるようなものはなかった。

（ええと、なんかなかったかな）

と荷袋の中をこそごとと漁っていると、底の方から綿に包まれた小さな種を発見した。

（これ、前に拾ったやつだ）

力の種 と云われる珍しい樹木の種子だった。子供の頃に運良く拾って、大事に仕舞っておいたのをすっかり忘れていた。

「これあげるね。力の種ってゆうの」

「こんな貴重なもの、受け取れないよ」

「いいの、酒場を覚えてくれたお礼と、お誕生日のプレゼント。だから受け取って」

気がつくとき、すらすらとしゃべれるようになった。少年の温かさに触れて、固く閉じこもっていた心が解きほぐされた気分だ。

「……うん、ありがとうね。嬉しいな」

少年は種を受けとると、につこりと微笑んだ。空の切れ目からお日さまが覗いたような、混じりっ気なしの笑顔だった。

「明日、王さまのもとへ行く前に食べるね」

「王さま？」

「僕、明日から旅に出るんだ。アリアハン王の許可をもらって、父さんの、勇者オルテガの足跡をたどろうと思うんだ」

「旅って遠くまで行くの？」

「……うん、とても遠くまで、ね」

少年の瞳に寂しげな光が宿る。

幼くして父を亡くし、魔王バラモスを討つ宿命を科せられた少年の言葉の重みを、ラミーは知るよしもない。

若き勇者の双肩に、全人類の命運がかかっているなどとはつゆ知らず、

（もしかして、お腹痛いのかな……）

とどうでもいい心配をして気を揉むラミーなのだった。

×

王城の西、居酒屋や娼館が軒を連ねる繁華街の一角に、その酒場はあった。

「ここかな？」

うらぶれた店の雰囲気、ラミーは思わず身構えた。もとより酒場に入るのは初めての経験なので、どうしても腰がひけてしまう。

（けど、彼が教えてくれたんだもの）

ラミーは勇気を振り絞ると、えいやっとドアを推して店の中に進んだ。

「いらっしやい。ここはルイーダの店。旅人たちが仲間を求めて集

まる出会いと別れの酒場よ」

カウンターの内側に立つ妙齡の女性が、そう声をかけてきた。アンニユイな面持ちで、洗い立てのグラスをクロスで拭いている。

「あの……」

ラミーはおそろおそろ店内を見わたした。

外見に比べて店内は広く、薄暗い酒場内にはちらほらと客の姿が見受けられた。物々しい甲冑を着込んだ戦士、僧服姿のひげ面の男性、バニー服の艶容な女性など、明らかに堅気ではない連中が数多くみられた。

（うわ、なにここ、なんなのここ？）

ラミーはがちがちに固まる。どうやら来る場所を間違えたらしい。

「お飲み物は？」

「へ？」

「ご注文はどうするの？」

ルイーダがへんな顔をした。

酒場に来て、何も注文しないでハイさよならというわけにもいかない。

仕方なくラミーはぶどうジュースを頼んだ。

「あ、あの」

「なにかしら？」

「ここって、旅の仲間を募るところですよ。一緒に城の外に出てくれる仲間を」

ぶどうジュースをふたくちみくち嚙ると、ラミーはおそろおそろ尋ねた。

「もちろんそうよ」

「わたしでも、冒険者の仲間をつくることはできますか？」

「うーん、そうねえ」

ルイーダは前髪を掻き上げると、値踏みするような目でラミーを上から下まで眺めおろした。

「……ここはあくまで仲介をしているだけなの。だから、実際に一

緒に戦ってくれるかどうかは、その人の実力や人柄次第ね」

「というのは？」

「分からない子ねえ。ここはね、傭兵を雇う場所じゃないの。共に戦う仲間を探す場所なのよ。戦友を募るからには、貴方自身、彼らの仲間として相応しい力を持つことが重要なものよ」

「戦えないとだめですか？」

「そうね。少なくとも、自分の背中を預けられるくらいには、戦える必要があるわね」

身も蓋もないことを言われた。

そう言われても、ラミーはつい数時間前まで、家に引きこもってすごしていたのだ。戦う力など皆無である。

「でも、どうしてもレーベに行きたいんです。お願いします」

まさか、家から追い出されてほかに行くあてがない、などとは言えない。ひたすらルイーダを拝み倒した。

「じゃあ、一応聞いてみるわね」

無駄でしょうけど、のひと言を呑みこんで、ルイーダが酒場中に轟くような大声を出した。

「ねえ、新しい仲間よ。ラミーって女の子で、一緒にレーベまで行ってくれる人を募集しているの。だれか一枚咬まない？」

「お、お願いします！」

ルイーダに負けないよう、ラミーも目一杯声を張りあげる。

が、薄暗い酒場の片隅から戻ってきたのは、嘲るようなクスクス笑いだった。

「ま、こうなると思ってたわ」

「うっ……」

「あとは大枚を積むしかないわねえ」

「五〇ゴールドで足りませんか？」

全財産を告げると、ルイーダは首を横へ振った。この程度の金では人は動かない。

勇者ほどのカリスマ性を持ち、世界を救うという崇高な理念のも

とに勇士を募るのなら話は別だが、ただの女の子と一緒に旅をしたがる冒険者など皆無なのだった。

「残念だけど」

「わかりました。ありがとうございます」

ラミーは肩を落とし、酒代を支払うとすぐことルイーダの酒場から出て行った。

×

（仲間、できなかった）

ラミーは路地裏をあてどなく歩きまわった。せつかく糸口を掴んだと思ったのに、結局うまく行かなかった。

（大人って、なんて意地悪なんだろ）

いつしか、酒場で自分を笑いものにした冒険者たちに憎悪が向かった。

レベル1で、武器や防具すら装備しないで仲間を集めに来たラミーなど、そもそも世間知らずの極地なのだが、当の本人はそんなことなど知るよしもない。

ただバカにされたのが悔しくて、口惜しくて、呆然としたまま寂れた街を歩きまわった。

午後遅くなると雨が降ってきた。

雨宿り先を探そうとしたが、なかなか見つからず、気がつくとなぜ濡れになってしまった。

（何やってんだろわたし）

前髪から雨のしずくが滴る。ぬれた布の服が重く、水たまりを踏んだ靴がじゅぶじゅぶと気色悪い音を鳴らした。

しだいに寒さを増し、歯ががちがちと鳴る。このままでは風邪をひいてしまう。どこかで宿に泊まらないと、と繁華街のいかがわしい宿場へと足を向ける。

（この辺の宿屋って、宿泊だけじゃなくて休憩もできるんだ。変わ

ってるな〜)

手頃な価格の連れこみ宿へ入ろうとしたとき、ふいに建物と建物の隙間の細い路地から女性の悲鳴がきこえた。

「やめてくださいッ!」

「へへ、可愛い声してんなあ」

ひょいと覗きこむと、黒髪ツインテールな少女が巨漢に腕を掴まれている。

身の丈一八〇メートルはある大柄な男だ。頭に荒布を巻き、腕に錨の形をした刺青を彫っている。おそらく、失業してしまった漁師のなれの果てだろう。

海の魔物が活発化してからというもの、漁師は商売あがったりである。このところ大量の失業者が城下町に溢れ、あちこちで問題を起こしている、と耳に挟んだことがある。

「いいじゃねえかよ。おれとそこの宿屋でお楽しみといこうぜ」

「イヤッ! 離しなさいッ!」

「なあ良いだろ。まずはぱふぱふ——」

「あのー……」

ラミーがおそろおそろ声をかけると、男は「あん?」とがらのわるい声を出してメンチを切ってくる。

(こ、怖い……)

思わず逃げたくなるが、勇気を振り絞る。数時間前のラミーだったら考えられないが、あの少年の笑顔を胸の中に思い描くと、ふしぎと「勇気」が湧いてくる気がした。

「その子、嫌がってると思うんですけど」

「あ?」

と声を荒げるが、すぐに相手が年端も行かない少女だと気づき、鼻の下を伸ばした。二人の少女と組んずほぐれつ歡樂に耽るプランが、男のおめでたい脳裏で展開された。

「へへ、なあに。これは遊びだよ」

「遊び?」

「おれとこの子はな、ちよいとイイ仲なわけよ。嫌がってるのだって演技なのさ。イヤよイヤよも好きのうちってな」

「違う！ あたしはそんな……」

少女が刃向かおうとすると、男は怖い顔をして少女を牽制した。それから改めて、すけこましを気取って揉み手をしてくる。

「なあ、別におれはただで遊ばうってんじゃねえんだ。一晚相手をしてくれたら、一人あたまで60G、いや80Gは出してやらあ。お嬢ちゃんたちくらいの上玉なら、そんなの金はまるで惜しくねえからな」

「……ゲス野郎」

ツインテールの少女が小声でつぶやくと、それが短気な男の逆鱗に触れたのか「黙れくそガキが！」と威嚇した。

もともと女は殴って屈服させるのが信条の男である。優男を装ったところで、挑発されると笑ってしまっただけで簡単に地が出るのだ。

「ほら、嫌がってるじゃないの。早く手を離しなさい！」

確信を得たラミーが勢い込んで言った。

根が単純なラミーは、一瞬、男と遊んだ金で冒険者を雇えないか、と思った。遊ぶの意味を単なるトランプ程度だと誤解して、一晚遊んで金がもらえるなら悪くない、と誘惑に屈しかけたところである（けど、この子、嫌がってるもの）

嫌がる女の子に無理強いするような男は女性の敵、いや人類の敵だ。

「離さないなら人を呼びますからね」

「てめえ……」

男のひたいに青筋がつかぶ。乳臭い少女に反抗され、怒り心頭に発したのだ。

男は片腕に少女を掴んだまま、もう片方の手でラミーを掴みかかろうとした。

筋骨隆々の大男だけあって動きが素早く、すんでのところで捕えられそうになる。

「ひっ」

突っ込んでくる男の威圧感に、足がすくんだ。逃げ足のテンポがずれ、足が絡んでべたんとぬれた地面に尻餅をついた。

「逃げてッ！」

と少女が叫ぶが、尻餅をついた時点でアウトだ。飛びついてきた男に胸ぐらを掴まれ、乱暴に乳房を揉みしだかれた。

「へっ、小賢しいガキのくせして、生意気にしつかりと膨らんでらあ」

「や、離して」

「へへへ、今夜は両手に花か。たまんねえなあ、おい」

胸を鷲掴みにされ、心臓が凍りつく。男の手はマドハンド並みの大きさだ。振りほどこうとしても、ラミーの非力さではとうてい太刀打ちできない。

（お、お母さん……）

男の胸をまさぐられ、ラミーの目から涙がこぼれた。遅まきながら、脳天気なラミーにも、これから何が行われるかおぼろげながら理解できた。

「最低……」

「ん？」

「あつたまきた」

それまで無抵抗だったツインテールの少女が、ふと面を上げる。それまでのか弱い少女の面影はどこにもなく、毅然とした瞳は不屈の炎を宿してめらめらと燃えている。

「……最後にもう一度言っわ。今すぐあたしたちを離しなさい」

「はっ。だれが離すか——」

「なら死ね」

そう吐き捨てた瞬間、少女は目にもとまらぬ速さで二本の指を男の目に突き刺した。

「ぐおッ！」

目くらましをされ、男はたまらず両目を抑えた。ラミーと少女は

男の野太い腕から解放される。

そのまま地べたへ突っ伏すラミーとは対照的に、少女はさらなる追撃を繰りだした。

建物の壁を利用して、三角飛びで空高く飛びあがると、片膝を突きだして男の顔面めがけて体当たりをぶちかました。

「ふんがッ！」

前歯のへし折れる不愉快な音がして、男が横ざまに吹っ飛んだ。少女の放った渾身の飛び膝蹴りを浴びて、一撃のもとK・Oされたのだった。

「ゲスにはお似合いの末路ね」

「こ、殺しちゃったの？」

ようやくシヨックから回復したラミーが尋ねると、少女は頬を赤らめて、

「殺すと言ったのは、その……言葉のあやよ。大丈夫、のびてるだけだから」

念のため、気絶した男のまぶたを押し開いて眼球の無事をたしかめると、少女はふうと嘆息した。内心、本気で殺してしまったんじゃないかと不安だったようである。

「助けてくれてありがとうね」

「こ、こちらこそ」

むしろ、助けてもらったのはラミーの方だ。彼女がこんなに強いとは思わなかった。

「どうしてさつさと倒さなかったの？」

「武術は私利私欲のために使ってはならないの。人を守るためのものだから」

「自衛なのには？」

「自衛だろうとなんだらうと、自分自身のために拳を振るうのは、武闘家として恥ずべき行いよ。それが師匠の教えなの」

では、偶然ラミーが通りかからなかったら、彼女はどうしていたんだろうか。

「そういえば、名乗るのがまだだったわね。あたしはアリアハン北地区のリズ」

「わたしは中央区のラミー」と慌てて名乗りがえした。

「ラミー。可愛い名前ね」

「あなたもね」

リズは一瞬きよとしたが、すぐにふつと頬を緩める。武闘家だと言ったが、その割には優しい印象の女の子だった。

その2

その日は酒場の二階へ一泊し、翌朝、二人は旅立ちの準備を整えに市場へと向かった。

「なんで顔伏せてるのよ」

「うっ、この辺は苦手……」

ラミーはリズの背後に隠れながら歩いた。

この辺りは自宅からほど近い。母親と鉢合わせることはそうそうないだろうが、知り合いに会う危険はある。

これから旅立とうというときに、知人のオバちゃんから「あー、だれかと思ったらラミーちゃんじゃないの。元気してたあ？」などと気さくに声をかけられたら台無しだ。

「ラミーって変わってるわねえ」

リズに呆れられながらも、ラミーは必死でこそこそと往来の商店へと入っていった。

中央通りに面したその店は、武器と防具を扱う専門店だ。店内の壁にはずらりと刀剣類が掛けられ、中央の天鵝絨敷きの台には高価な魔法の道具が陳列してある。

（うわあ、高そうな店……）

懐の38G（色々使って目減りしてしまった）を、服の上から手で押さえる。こんなはした金で、武器が買えるのだろうか。

「どれにする？」

「リズはどうするの？」

「あたしは武器は使わないの。鍛えた拳があれば、それでじゅうぶんだもの」

そう言って拳骨をつくってみせる。

武闘家は鍛え抜いた身体が、強力な武器となるようである。

リズはそれでいいとして、問題はラミーの方だ。

（銅の剣が…… 100G！）

思わず口が半開きになる。

街で見かける冒険者の大半は帯剣しているが、今のラミーの手持ちでは、とうてい手が出せない。かろうじて、30Gのこん棒に手が届くくらいだ。

（でも、これを買ったら、ほかに何も買えなくなっちゃうな）

薬草もなしに冒険に出るのは自殺行為だ。ここは妥協して、一番安価な5Gのひのきの棒を買い求めることにした。

「これください」

「あいよ。ひのきの棒だね。ここで装備していくかい？」

「あ、ハイ。お願いします」

装備、すなわち持ち主の体格や腕力に合わせて、店員さんがフィッティングをしてくれる。

ひのきの棒の場合、柄の部分にすっぽ抜け防止のための革のストラップがついているので、その長さを調節してもらった。

「えへ。なんだかトルミみたいだね」

「こん棒でないだけマシね」

「似合う？」とラミーは胸を張る。

「ええ、とっても」

腰にひのきの棒を差して、ラミーはまんざらでもなさそうな照れ笑いをした。武器を装備すると、いよいよ冒険の旅に出る実感が湧いてくる。

「防具はどうするの？」

「うーん」

ラミーはちらちらと衣紋掛けに並べられた衣服を見つめる。店で売られている服の大半は、肩や手足の生地を厚くした旅人の服だ。それより上のクラスの防具となると、牛革をふんだんに用いた革の鎧や革の盾がある。

革製品はもちろん、今の貧しい懐具合では旅人の服にすら手が届

かないのが実状だ。

仕方なく、布の服一枚での冒険となる。

「あたしは身軽な方がいいけど、ラミーはそんな装備で大丈夫なの？」

「大丈夫、問題ない……と思いたい」

不安が拭えないけれど、まさか「お金がなくて買えません」とは言えない。眉をひそめるリスにあははと笑って誤魔化した。

つづいて、道具屋へと立ち寄った。

涙を吞んで武器のグレードを落としたのだ。その分、薬草はしっかりと買っておく。

「薬草8Gかあ。地味に高いね」

「必要な出費だもの。仕方ないわね」

幾つ買うべきか迷ったが、そのほかにも地図や携行食糧など、旅の道具を揃える必要があるので、三つ分で妥協した。

×

城壁周辺まで来ると、人通りがまばらだった。

城門では、鎖帷子を着込んだ兵士たちが、物々しく警戒態勢を敷いている。

ほんの十数年前までは、アリアハンの王都は、ロマリアやポルトガからの定期便で賑わっていたそうである。

だが、ラミーやリスの物心がついた頃には、すでに街は往年の活気を失って久しかった。海の魔物によって海路が封鎖され、他国との船便の行き来が途絶えてしまったためだ。

「一度、船に乗ってみたいなあ」

「そうね。遠くの国に行ってみたいわね」

「リスはどこ行きたい？」

「そうねえ」

リズはトレードマークのツインテールをいじると、

「イシスに行ってみたいわ」

「イシス？」

「砂漠のオアシスにある国。神秘的な女王さまが統治している国だときくわ」

「へえ」

「あたし、その女王さまに会ってみたいの。きっと素敵な御方なんでしょうね」

うつとりと語る。

リズって意外とロマンチックなんだな、とラミーは思った。

自分はスパイシーなポルトガ料理をおなか一杯食べたいな、と言おうとしたが、さすがに気後れがしてやめた。

そんなことを話しながら、城門の詰め所で旅立ちの手続を済ませた。

城壁の周辺は、見たすかぎりの麦畑だ。城の兵士や、武器を手にした自警団の団員たちが魔物の襲撃に備えて付近を巡回している。空から出現するモンスターに作物を食い荒らされるのを防ぐため、収穫期前ともなると多くの男たちが動員される。

みせしめとして殺された大がらすが数匹、木の枝に吊されて、ぶらぶらと揺れているのが不気味だった。

「うーん、良い天気だなあ」

ラミーは胸一杯に新鮮な空気を吸いこんだ。

家の外に出るのは久しぶりだが、城壁の外に出たのはそれこそ幼少期以来だ。

狭くごみごみした城下町を抜けだして、広々とした草原を目の当たりにすると、開放感もひとしおだった。

「油断しないでラミー。この辺りはモンスターの群れが出るわ」

リズは注意深く辺りを眺めまわした。

アリアハン大陸のモンスターは比較的弱く、出会って早々、殺さ

れるようなことはほとんどない。他の大陸から隔絶されているため、危険なモンスターの侵略を受けずに済んでいた。

とはいえ、数十人程度の死者は毎年出ているし、油断した冒険者が行方不明になることもしばしばだ。

アリアハンとレーベ間のごく短い距離であろうと油断は禁物だった。

「城を出たら、川沿いを少し上流へ向かうの。橋を渡ると森が見えてくるから、森を迂回して北上、そこから1800リーグほど行くと、レーベが見えてくるはずだわ」

リスが地図を片手に、レーベ村までの道順を説明してくれた。

「地図、ぜんぜん分かんない……」

生まれつき方向音痴のラミーは、地図すらろくに読めない始末だ。実際の風景と、平面の地図とがぜんぜんかみ合わなくて、目がまわってくる。

「慣れたら読めるようになるわ」

「リスは凄いな」

「凄くなんか。あたしの場合、親が行商をしてて、子供の頃よく一緒に旅をしたの。それで地図の見方を覚えちゃった」

「へえ、頼もしいな」

川べりを歩いていき、もう少しで橋にさしかかろうというところで突然それは現れた。

「ぴきーッ！」

可愛らしい啼き声と共に、草むらから水色をした物体が飛びだしてきた。つぶらな瞳をしたタマネギ型の生き物が三匹。完全な不意打ちだった。

「気をつけて！ スライムの群れよ！」

「えっ、わっ！」

ラミーはあたふたして、腰のひのきの棒を掴もうとした。まるで訓練してこなかったので、とっさに身構えられない。

相手はラミーたちが身構えるより早く襲いかかってきた。

先陣を切ったスライムが、武器を取ろうと四苦八苦するラミーめがけて体当たりをぶちかましてくる。

「わっぷ！」

不敵な笑みをうかべ、スライムはラミーの顔面へと張りついてきた。

「んぐぐ」

ぶよぶよした物体が、ラミーの口と鼻を塞いでくる。

片手で引っぺがそうとしたが、ぐにっと伸びてなかなか離れなかった。

（い、息ができない……）

一瞬ふらつとして気が遠くなる。

が、ようやくひのきの棒を手にとると、躊躇うことなく自分の顔面めがけて突きだした。

「っぷはあ！」

ひのきの棒の尖った先端を顔とスライムの隙間へ差し込み、てこの原理でひき離れた。

そのまま地面へと叩きつける。

「こ、こんにやろめ！」

めまいをこらえ、スライムの尖った頭頂部を、ひのきの棒でぐりぐりした。

ぴー、と情けない声をだしてスライムはぺしゃんこに潰れた。

棒で一気に貫き、完全に息の根を止める。

「リス！」とラミーは叫んだ。

「こっちは任せて！」

リスの方はスライム二匹を相手どって余裕の立ちまわりを演じている。

飛びかかってきたスライムをチョップで真つ二つに割る。

さらに、その場から逃げようとしたスライムめがけて河原の石を投げつけた。

石つぶては見事スライムの後頭部に命中し、あえなくきゅうと気

絶した。

「ま、こんなものね」

服の埃をぱんぱんと払い落とし、リズはすまし顔をした。

「っ、強い……」

「ラミー、そっちは大丈夫？」

「なんとか」

笑顔を作ろうとして、リズは思わずよろける。

スライムに鼻と口を塞がれて、脳が少し酸欠気味だった。

「大丈夫？ 顔色が優れないわ」

「平気。たかがスライム一匹だもんね」

そう強がってみせるが、明らかに顔が青ざめて、唇がふるえている。

生まれて初めてモンスターと遭遇し、それを殺したのだ。

ダメージ自体は微々たるものだが、精神的ショックが大きかった。

「少し休みましょうか？」

「うっん、ぐずぐずしてたら日が暮れちゃう。日暮れ前には村に着かないと。ね？」

無理に元気を取りつくろうと、ラミーは出発することにした。

×

橋を通って、レーベ近郊の森へ到着するまでのあいだ、もう一回小競り合いがあった。

橋を渡っている途中、頭上から大がらすが二匹、太陽を背に急降下してきた。

リズは素早くかわしたが、ラミーはまぶしさに気を取られて回避が遅れ、鋭い爪で腕を引っ搔かれてしまった。

ひのきの棒を振りかざし、カラスを追い払おうとしたが、空振り

を連発してしまった。

焦ってさらに大きく振りかぶる。

「ラミー、無茶しないで」

「け、けど……」

「走って！ こっちに来て！ 早く！」

と、リズが大急ぎで棧橋を渡りだした。ラミーも負傷した腕を庇いながら、慌てて彼女の後を追いかける。

「かあ！」

せつかくの新鮮な肉を逃すまいとして、大がらすたちは突進してきた。

無謀にも真つ正面から向かってくる。

「今よ！」

からすどもが背後まで肉薄したところで、二人はくるりと振り向いて攻勢に打って出た。

まさか人間たちが反撃してくるとは予想してなかった大がらすどもは、上空へ逃げる暇もなく二人の攻撃をともに喰らった。

「ぐえええッ！」

ラミーが棒を振ると、からすは片翼を撃たれて失墜した。

もう一匹はリズの素早い手刀でくちばしを叩き落とされた。

橋桁の上でもがくからすどもを、リズは靴底で容赦なく踏み殺した。

頭をかかとで掻き潰され、濃緑の体液が飛び散る。

「うつ」

たちこめる臭気にラミーは口を抑えた。

大がらすの死骸はスライムと違い生々しかった。

酷薄な死の現実を見せつけられ、こらえていたものが我慢の限界に達した。

「ちよつとごめん」

とたた、と小走りで川辺へ駆け寄ると、ラミーは嘔吐した。緊張で朝からろくに食べてなかったから、口から出るのは胃液だけで、

それが余計に辛かった。

リズが背中を撫でてくれる。吐き気の衝動が収まると、水を汲んで飲ませてくれた。

「落ち着いた？」

「うん……ごめんね。迷惑かけちゃって」

木陰に腰をおろしたラミーは、打ちひしがれて呆然とした。

（戦うって、こういうことなんだ）

武器さえ振りまわしていればなんとかなる、とお気楽に考えていた自分が恥ずかしかった。

命の奪い合いは、想像以上に過酷で残酷なものだった。

「腕、怪我してるわね。待ってて、今薬草を塗ってあげるね」

「ま、まだ大丈夫だよ」

「ぜんぜん大丈夫そうには見えないわ。ほら、大人しく横になって」

リズに言われるまま、ラミーは身体を横たえた。すり潰した薬草を患部に塗りこまれると、涙が出るほどしみる。

ちよっと前までのラミーなら、痛くしないですよ、と文句を言うところだが、今は大人しく痛みに耐えるだけの分別があった。

「これでよし……と。しばらくここで休憩しましょうか」

「でも、あんまり休みすぎると遅れちゃうよ？」

「二、三〇分くらいなら平気よ。ここなら見晴らしが良いから不意打ちを食らう心配もないし、安心して休めるわ」

リズが気を遣ってくれている。

これ以上、彼女の好意に甘えたくはなかったけれど、無理をしてさらなる迷惑をかけるのはもっと嫌だった。

「じゃあ、少し休むね」

リズは横になると、じんと疼く腕の包帯を撫でながら目を閉じた。

（わたし、ほんと足手まといだ）

自分の不甲斐なさに目頭が熱くなる。

目をきつくつむって涙をこらえた。

（泣くな。泣いたら最悪だ）

そう自分に言いかけると、ラミーは赤く腫れた目で、遠くにか
すむアリアハン城の城壁をぐっと睨んだ。

その3

多めに休憩を取ったのがたたって、二人が森の入り口に到着したのは、日が傾きだした頃だった。

「参ったわね。あたしが以前旅したときに比べると、だいぶ遅れてしまったわ」

リズがほぞを咬んだ。

「ごめんなさい。わたしのせいで」

「ラミーは悪くないわ。あたしの計画が悪かったの」
リズが慰めた。

とはいえ、困ったことになってしまった。

夜になるとモンスターが凶暴化する。

夜間戦闘に慣れた歴戦の猛者ならまだしも、新米二人で夜営をするのはどだい無謀だ。

「このまま迂回ルートを行ったら、確実に夜になるわね。あとは森の中を突っ切る最短ルートを進むしか……」

リズの表情が曇る。

森の中は魔物の出現率が高い。途中で迷って森の中で夜を迎えるはめになったら最悪だ。

「ラミーはどうしたい？」

「うーん」

どちらのルートも一長一短だ。容易には決められないが、迷っている時間も今は惜しい。

「……うん、森の中を往こう」
そう腹をくくる。

どのみち危険な目に遭うのは変わらない。それなら、なるべく早く村へ到着できる道を選びたい。

「分かったわ。じゃあ、森の中を突っ切るから準備をして」

リスは二つめの薬草を傷口に塗った。彼女も大がらすにつつかれて、数力所から血を流していた。

残りひとつとなった薬草は不測の事態に備えてとっておくことにした。

二人は無言でうなずき合うと、薄暗い森の中へと分け入った。

レーベ周辺は、東西数千リーグにわたって深緑の森が連なっている大森林地帯だ。

地理に明るい地元民ですら迷うほどの森を、旅慣れない二人はおそるおそる進んでゆく。

「このまま北上するわ」

「北って、どっちが北なの？」

ラミーはきよろきよろした。

鬱蒼たる森の中では、東西南北が分からなくなるのはよくあることだ。

高台に出て現在位置と方角を確認しないと、森の中をぐるぐる堂々めぐりしてしまうおそれがある。

「苔がたくさん生えている方が北、という話を父から聞いたことがあるわ」

「どうして？」

「苔は日の当たらない北側に生えるの」

「……それ、あてになるの？」

周囲の樹木は、あちらこちらに苔がむしている。正直、この森の中では、その雑学は役立つ気がしなかった。

とはいえ、まったくの指針なしでは途方に暮れるので、リスの雑学を信じて、なるべく苔が多く生えている方角へと進んだ。

それから数十分。

日没間際になって、リスが途方に暮れた様子で様子でつぶやく。

「おかしいわ。そろそろレーベに到着しても良い頃なんだけど……」
「迷った？」

「……たぶん」

リズの表情に不安がよぎる。

遠くから狼の遠吠えが聞こえ、夕日が山間へと沈んだ。

宵闇が森の中を黒々としたベールでうつすらと包みこんでゆく。

（ああ、夜になっちゃった）

森の梢の隙間から、ぼっかりと薄色のお月さまが覗く。

二人は手荷物の中から、松明を取って灯りをつけることにした。

それが拙かった。

松明の灯りを察知したのか、周囲の茂みから、金色に輝く無数の瞳が覗いた。

夜行性のモンスターが、夜の訪れを待って襲撃してきたのだ。

「一角うさぎの群れだわ！」

ひたいから角を生やしたうさぎが五匹、茂みの中から次つぎに飛びだしてきた。

「よけてッ！」

リズに怒鳴られ、慌ててイチイの木の下に隠れた。

群れの一匹が勢い余って木の幹へと突進してくる。かつ、と音を立てて鋭い角が突き刺さる音がした。

「ラミー、木に登って！」

「えっ、でも」

「早く！」

リズに言われるまま、ラミーはイチイの木によじ登る。

そこへ二匹目のうさぎが角を突きだしてきた。

すんでのところで片足を刺されそうになる。うさぎの顔をえいと蹴飛ばしてやると、ころんと転がってまんまるの毛玉と化した。

（あ、ちよっと可愛い）

などと脳天気なことを思っている暇もなく、残りのうさぎがどつと押し寄せてくる。

さっさと太い枝のところまで待避した。

「……やれやれね」

と命からがら隣の木によじ登ったリズが声をかけてくる。

「ああリズ、貴女、大丈夫——」

言いかけて絶句した。

月明かりに照らされたリズの腹部が黒く染まっている。四方八方からの猛攻をさげきれず、角で一突きされたのだ。

「その傷……」

「油断しちゃったわ」

リズがしかめつつらをする。手で抑えた腹部から、じんわりと血が滲みだしてくる。

（違う。油断したんじゃない）

五匹もいたうさが、ラミーの方へは一匹しか来なかった。残りの四匹をリズが一手にひき受けてくれたのだ。

足場のわるい森の中で、四方から襲われたら、いくら身軽な武闘家とて、かわしきれるものではない。

「待つてて、いま薬草を……」

「投げてはだめッ!」

ラミーが最後の一個となった薬草を投げて寄越そうすると、リズは鋭く制止した。

「怒鳴ってごめんなさい。けどあたし、今の状態だと受け止める自信がないの。下に落としちゃったら、体力を回復する手段がなくなるわ。それは貴女が持つてなさい」

「け、けど……」

「大丈夫。あたしは大丈夫だから」

「全然大丈夫じゃないよ。だってリズ、わたしのために罔になってくれたんでしょ。なのに、それなのに……」

ラミーは声を詰まらせる。

今日一日、リズは旅に不慣れなラミーの身を案じて、つねに率先して行動してくれた。あくまで対等なパートナーのはずなのに、結局、守られっぱなしだった。

拳げ句は敵の攻撃から逃げ遅れて、リズに無理をさせてしまい、

ひどい手傷を負わせてしまったのだ。

（わたし、ほんとバカだ）

不甲斐なさで自己嫌悪とで、また涙が出そうになる。

リスのために、今すぐ下に飛び降りて、周囲をうろつきまわっている憎らしいうさぎどもを蹴散らしたい。そしてリスのもとへ駆けつけて、傷の手当てをしてあげたい。

けれど、今のラミーが突っこんだところで、一角うさぎ五匹を相手に勝ち目はない。

それに万が一、ラミーが無謀な突撃をしようものなら、リスは重症の身を押しても加勢しようとするだろう。

（そうになったら、わたしだけじゃなくてリスまで死んでしまう……）
頭の中の冷静な部分が待ったをかける。

（耐えろ、激情に動かされるな）

ラミーは唇を噛みしめた。

今、自分に出来ることは、必死にリスを励まして、うさぎたちが諦めて去るのを待つのみだ。

不甲斐ないけど、それが現実だ。

（早く、早くどっか行つて！ お願いだから！）

一角うさぎの群れが諦めるのを待つ。

だが、うさぎたちも空腹なのか、いつこうに立ち去る気配はない。獲物が疲れて落ちてくるのを、手ぐすね引いて待ち構えている。

そのまま三〇分が経過した。

だんだん幹にまわした腕が痺れてくる。

このまま持久戦になると、体力が持たなくなるおそれがあった。

「ねえラミー」

「どうしたの？」

「あたしが合図をしたら、貴女は走って逃げて。そのあいだに、あたしがあいつらを引きつけるから」

「何言ってるの？ そんな身体で無茶すぎるよ。このまま上で待とうよ」

「手に力が入らなくなってるの。たぶん、あいつらが諦める前に、あたしの方が限界になると思うわ。だから、せめて体力が尽きる前に一矢報いてやる」

「で、でも……」

「あたしのことなら心配しないで。一人だけならどうとでも戦えるから」

苦痛をこらえ、一句一句、区切るような口調。こんな苦しげなりズは初めてだった。

「わ、わたしも戦う」

「……正直に言っわ。貴女が居ると足手まといなの。さつさと逃げてくれた方が、戦いやすくなるのよ」

残酷な真実。

口先ではパートナーと言いつつも、実際は単なる護衛の対象でしかなかった。脳天気なラミーは、そんなことすら気づかなかった。

涙さえ出てこない。

リズの優しさがしみて、ただ、自分の無力さが辛かった。情けなかった。

口惜しくて、仕方なかった。

「あたしが南側へ飛んだら、ラミーは北の方へ全力で走って。絶対、振り向かないこと。怪我をしても、うさぎの追跡を振り切るまで薬草を使ってはだめ。いいわね？」

「リズ……」

「じゃあ、行くわよ」

リズが覚悟を決めて手を離そうとしたそのとき、ふいに近くの木陰が揺れた。

ライラックの茂みの中から、突如として小柄な少女がずっと立ちあがる。

（だ、だれなの？）

うさぎが不審者の存在に気づき、いつせいに飛びかかるうとした。「メラッ！」

少女が呪文を唱えると、手のひらの上に拳大の魔法の火球が生じた。

火球はそのまま先陣を切って突進してきたうさぎへと命中し、その顔を焦がした。

「今だっ！」と魔法使いの少女が合図した。

毛と肉の焦げる悪臭のなか、横の茂みから二人の男たちが打って出た。

一人は筋骨隆々たる甲冑の戦士。手にしたこん棒を振りまわすと、うさぎが一匹、二匹と叩き潰されてゆく。

大柄な戦士の脇を抜けるようにして、一陣の風が生じた。

風を切り裂いてあらわれたのは、ラミーの見覚えのある少年だった。

「あ、オルテガさんとこの……」

名前も知らない少年。

城下町で出会ったあの小さな勇者が、目にも止まらぬ早業で踏みこむと、鞘走った銅の剣でうさぎの胴体を一刀両断にした。

返す刀で、飛びかかってきた最後の一匹を袈裟懸けに斬りつける。魔法使いがメラを放ってから、ほんの十数秒。

その短時間で、五匹もいた一角うさぎをすべて屠ってしまった。

「な、なんて早業なの……」

樹上からすべり落ちてきたリズが、愕然として死屍累々たる現場を眺める。

自分たちがあれほど苦戦した相手を、こんな易々と倒されたのが信じがたいのか、腹の痛みも忘れて呆然と立ちすくんでいる。

「君たち、怪我はない？」

少年が穏やかな笑みをうかべてリズとラミーのもとへ歩み寄ってくる。

「ゆ、勇者さま……」

自然と、その敬称が口からこぼれた。

勇者オルテガの二代目なのだから、少年を勇者と呼ぶのはしごく

当然ではある。

だが、何故か血筋なんてまったく意識しないまま、ラミーは彼を勇者だと認識した。

彼の放つ瞳の輝きが、勇者と呼ぶに相応しいものだ、と、無意識のうちに感じとったのだ。

「ああ、君は先日……」

「ラミーです」

改めて名乗る。

昨日会ったときは、人と話すのが久しぶりでドキドキしたが、今ふたたび名乗っても、まだドキドキした。

「どうしてこんな森の中に？」

「それは……」

「勇者どの。負傷したレディーをさしおいてご歓談とは感心しませんなあ」

と、他の三人に遅れて登場したのは、ヒゲ面の僧侶だ。年頃は三十代半ばだろう。他のパーティに比べると落ち着いた雰囲気、怪我をしたリズの方へ屈みこんだ。

「ほらご覧なさい。怪我をしておられる」

「ごめんなさい。気づきませんでした」

勇者が申し訳なさそうな顔をする。

「あ、いえお氣遣いなく」

とリズが遠慮しようとする、

「なあに心配ご無用。小生、こう見えて癒しの術を心得ておりますでな。少々失敬」

僧侶らしからぬ好色な笑みをうかべると、男はリズのひき締まったお腹を撫でて、癒しの呪文を唱えた。

「ホイミッ！」

瞬間、彼の手から青白い光があふれ、傷口の細胞がみるみる盛り上がる。

魔法の力で治癒力が賦活され、数秒後には、傷はほとんど目立た

なくなつた。

「ありがとうございます。僧侶さま」

「なに、すべては神の思し召し。また怪我をするようなことがありましたら、遠慮なくこのデアゴめに――」

「やめるエロジジイ」

魔法使いの少女が、僧侶の頭を杖で叩く。

「やめてください、マリエどの。そんな強く叩かれると頭蓋が陥没してしまいますぞ」

「その方が世のためだ」

「ほ、これは手厳しい」

すぐ退散した僧侶の代わりに、魔法使いの少女が近寄ってくる。よくみると、ラミーたちより年下の少女だ。十五、あるいは十四歳くらいだろうか。

「おねえさんたち、大丈夫？」

「ええ、なんとかね」

「悪く思わないでね。あのエロジジイ、変態だけど回復呪文の腕はたしかなんだ」

そう言つて肩をすくめる。

その仕種があまりに可愛らしくて、ラミーたちは思わずくすりとした。

それにつられて少女もくすつと微笑した。

×

魔法使いのマリエ。僧侶のデアゴ。戦士のバルダス。

突如あらわれた冒険者たちは、勇者の旅の仲間だった。ラミーとおなじく、勇者の少年もルイーダで仲間を募つたのだ。

「バルダスが異変を聞きつけたんだ。近くでだれかが魔物に襲われ

てるって」

「……」

屈強な戦士が重々しくうなずく。

無口なたちなのか、ラミーの方に会釈したきり目をそらしてしま
った。

「しかし、無事で何よりでしたな。この辺りは一角うさぎの棲息地。
やつらは縄張りを荒らすヤカラを容赦しませんからなあ」

デアゴが、自慢のカイゼルヒゲを指で抓みながら言った。

「ああ、だからあんなに怒ってたのね」

リズが納得した様子で嘆息する。

うさぎたちがなかなか諦めなかったのは、そこが彼らの縄張りだ
ったからなのだ。

「ところで、君たちはレーベに行くんだよね。良かったら僕らと一
緒に行こう」

「いいんですか？」とラミーが尋ねる。

「うん、僕らもレーベに用があるんだ。それに、一緒に行った方が
安心だしね」

なんでも、離島にあるナジミの塔とやらへ行くために、薬草や毒
消し草などを多めに買っておきたいそうである。

そうとなれば遠慮は要らない。ラミーたちは喜んで勇者一行の好
意に甘えることにした。

×

その後は目立った小競り合いもなく、ラミーたちは勇者たちに前
後を守られながら森の中を進んだ。

ときどき、デアゴが鼻の下を伸ばしながらラミーたちの尻を熱心
に見つめたが、マリエがメラの呪文を唱えだしたのに気づき、慌て

て二人から離れた。

そうして三時間ほど歩き詰め、ようやくレーベに到着した頃には真夜中近かった。

「やっと着いたあ」とラミーは脱力した。

「こんなにかかるなんて思わなかったわ」

「大変な旅だったね」

「ほんとにね。ルビスさまのご加護に感謝しなくちゃならないわ」

二人は疲れた表情で笑い交わした。

あそこで偶然、勇者一行と鉢合わせていなかったら、今ごろは二人とも無惨な屍を野に晒していたところだ。そう思うと運が良かった、と言わざるを得なかった。

村に一軒しかない宿屋に投宿すると、ラミーとリズはベッドに倒れこんだ。

全身くたくたで、ひどく惨めで、骨がバラバラにされてしまったような無惨な気分だった。

リズも疲労困憊なのか、ぴくりともしない。

「お湯、もらってきたから」

勇者の少年が、甲斐甲斐しくたらいにお湯を張って持ってきてくれた。

「勇者さまにこんな真似をさせてしまつて」

「気にしないで。慣れてるから」

萎縮するリズに、少年は屈託なく微笑した。

男性が苦手なりズは赤面して目をそらした。

「では、お言葉に甘えて……」

勇者が柄杓で熱い湯を注ぎ足してくれる。

温かい湯につま先をそつとひたすと、身体の疲れがほぐれてゆく。ラミーはふう、と年寄りくさい吐息をした。

足湯を愉しんでいると、どつと眠気が押し寄せてきた。早々に足を拭くと、二人は床に就く準備を調えた。

「それじゃあお休み」

「おやすみなさい、勇者さま」

燭台のろうそくの火を吹き消すと、二人は布団を頭からかぶって就寝した。

疲れてくたただったが、逆に昂奮しすぎてまったく眠くならなかった。

久しぶりの外の世界、初めての魔物との戦い。生死の危険。

今日一日の体験が、めまぐるしく脳裏を駆けめぐる。これでは眠れという方が無理だ。

（寝ないと明日が辛いな）

ごろんと寝返りを打つ。

月明かりが窓辺から差しこみ、ラミーの枕もとを青白く照らした。

月光に手のひらをかざしてぼうつとしていると、

「眠れないの？」

隣のベッドでリスがもそもぞした。

「リス、起きてたんだ」

「ずっと考えごとしてたの」

リスがうつすらと目を開き、天井付近の闇を見つめている。

「……勇者さま、すごく強かった」

「うん」

「勇者さまだけじゃなくて、仲間の方たちもみんなそれぞれ一流の使い手だったわ」

リスは一呼吸おくと、

「あたし、まだまだ実力不足だわ。あんな一角うさぎの群れに翻弄されるなんて、ぜんぜん未熟者」

「でもリスはほとんど全部の魔物をひき受けてくれたよ。勇者さまたちは、みんなで分担して戦ったんだから強いのは当然だよ」

ラミーが慰めるが、リスはぐつと押し黙ってそれ以上、何も言わなかった。

武人として、彼らの強さに憧れるとともに、自らの不甲斐なさに

打ちのめされたのだ。

（勇者さま、かつこよかったな）

黙りこんだリスをよそに、ラミーはあの一瞬の戦いを脳裏に想い描いた。

銅の剣を巧みに扱い、魔物を一刀両断にした勇者の姿。

アリアハンの城下町で出会ったときは冴えない感じだったが、いざ戦闘となると、別人のような凛々しさだった。

（世界を救おうって人は、やっぱり凡人とは素質が違うんだろうなあ）

リスほど勇者に対して劣等感を感じたりはしなかった。

だが、彼女に迷惑をかけた自分自身が許せなかった。

勇者並みになるのは無理でも、せめてリスの片腕として信頼に足るくらいの実力は身につけたい。

布団の中で、ラミーはそう新たな決意を燃やした。

その4

周囲を深緑の森に包まれたレーベは、アリアハン大陸最北端の村だった。

周囲には幾つもの集落があるが、村と呼べるほどの大規模な集落は、このレーベくらいのものである。

朝、遅めに起床すると、すでに勇者たちの姿はなかった。ナジミの塔攻略に向けて、朝早くにチェックアウトしたそうだった。

「それじゃあ、ここでお別れね」

宿屋のフロントで、ラミーはリズとのパーティーを解散した。

「リズはこの先、どうするの？」

「しばらくレーベに滞在して、実力を磨こうと思うの。出来たら、勇者さまたちともう一度出会って、あたしを仲間に入れてもらえたらなって思ってる」

「勇者さまの仲間には？」

「ええ、勇者ご一行と魔王討伐なんて、武者修行にはもってこいでしょ？」

そう茶目つ気をだして微笑する。

それが命懸けの戦いであることは、彼女とて覚悟の上だろう。世界を闇で覆い尽くさんとするバラモスを打倒すべく、血で血を洗う茨道を進もうというのだ。

多くの「勇者」を名乗る青年たちが挑み、傷つき、志半ばで斃れた。かの少年もまた、父オルテガと同様の運命をたどるかもしれないのである。

「でも、勇者さまについていくなら、すっごく強くないとだめだよ」

「だから、しばらくはレーベ周辺で自主稽古に励むわ。この宿屋に

滞在してるから、何か困ったことがあったら気軽に訪ねてきてね」

「うん、じゃあね、リズ」

「またね」

リズと軽く抱き合うと、ラミーは別れを告げてレーベ村の道具屋を目指した。

×

母親から預かった手紙は、荷袋の一番底にしっかりと入れてある。道具屋の店番なんて初めての経験だが、生死を賭した戦いに比べたら楽勝だ。

そんな甘い考えで、ラミーは教えられた道具屋へつづく道を歩いた。地図によると、この先にくだんの道具屋があるらしかった。が、

「あ、あれ……？」

行けども行けども、道具屋らしき建物の影は見当たらなかった。はてな、と首を傾げながら、その周辺を何度も行ったり来たりする。店主がじきじきに描いて寄越してくれた地図だから、間違っているとは思えない。

（ま、迷ったのかな？）

誰かに道を訊こう、と思って立ち止まったとたん、背後から声をかけられた。

「おい、もしかしてラミーか？」

「おじさん！」

振り向くと、人なつっこい顔をした中年男が立っている。

手紙の主、道具屋主人のバッドンだった。

「いやあ、別嬪になったもんだなあ。あんまり見違えちまって、別人かと思っただぞ」

「おじさんは変わらないね」

歳を取ってやや後頭部が退いてはいるが、バッドンは昔の精力的

な姿のままだ。

ただ、以前に比べるとことなく覇気がなく、疲れきった顔をしているのが気がかりだった。

「お店に行こうと思ったんだけど、迷子になっちゃったの。おじさんのこの地図、本当に合ってるの？」

「……ああ、合ってるよ」

バッドンは少し逡巡したが、とうてい隠しきれないと腹を括ったのか、

「ラミー、足下を見てごらん」

「足もと？」

彼女の足もとにあるのは、黒く焦げた炭の塊くらいだ。盛大に焚き火でもしたんだろうか、と水と炭でぬかるんだ足もとを見る。

「おれの店だ」

「……えっ」

「三日前、おまえに手紙を出したあと、ボヤ騒ぎがあつてな。一夜にしてこのざまだ」

バッドンが焼け跡を眺めまわし、深々と失意に満ちたため息を吐いた。

火事があつた夜、バッドンが目覚めた頃には、天井が黒煙まみれだった。

商品を運びだす余裕もなく、バッドンは着の身着のまま店の二階から窓を破って飛び降り、九死に一生を得たそうである。

「おかげで片足、骨折しちまつてな」

そう言つて添え木をした右脚を撫でる。

当分は安静にしているよう言われたのだが、バッドンは重傷をおして、燃え尽きた店の撤去に取り組んでいた。

「すまんなあ。せつかく売り子として招いたのに、こんな有様でな」

「そんな。おじさんが無事で良かった」

「まあ、良かったんだか悪かったんだか、そいつは神のみぞ知る、だな」

火事はみるみる燃え広がり、店舗を焼き尽くすと、その隣の倉庫まで延焼した。

幸い、こちらはレーベ村の青年団が駆けつけて、素早く消火活動にあたってくれたおかげで焼失を免れたが、商品の大半は水をかぶって使い物にならなくなった。

「全焼しなかったただけマシなんだがな。どうもこう、魂が抜けちまった気分だよ。夢なら醒めてくれってな話だ」

そう語るバツドンの目はうつろだ。

自分がせつせと築きあげてきたものが、一夜にして崩壊したのが、いまだに信じられない。悪い夢であって欲しい。そんな哀切な想いがひしひしと伝わってくる。

「わたしに手伝えることあります？」

「そうだな。せつかく来てくれたんだ。青空営業だが、残っているもので店を開く。そいつを手伝ってくれ」

「諒解しました」

ラミーはてきぱきと後片付けをした。

廃材を一箇所に集め、荷車で郊外へと運んでゆく。脚のわるいバツドンのため、ラミーが重たい荷車を率先して牽いた。

午後になると、青年団のメンバーが数人、助太刀に来てくれたが、それでもあらかた片づけ終わる頃には夕方ちかくになっていた。

「つ、疲れた……」

へろへろになって、ラミーは切り株にもたれかかった。廃材を撤去して、店の周辺の土地を整えるだけで半日かかった。

「お疲れさん。意外と頑張り屋だな」

「そ、そうかな」

ラミーはぜえはあと荒い息を吐く。

どちらかと言うと、引っこみ思案な性格だと自分では思っていたが、そう言われるとそんな気がしてくる。

「いや、褒めてるんだ。ずいぶん頑張ってくれたな。店が焼けちまったから、たいした額は入ってないが受け取ってくれ」

バツドンが袋入りの銀貨を手渡してくれた。中を覗くと、80G分の銅貨がぎつしりと詰まっている。

「そんな、受け取れません」

「まさか！ おまえは今日一日、身を粉にして働いてくれただろ。これは正当な報酬だ」

袋を押し渡され、ラミーはしぶしぶ日当を受け取った。

店が焼けだされ、大変な状況なのにお金を受け取るのは、なんだか罪悪感があった。

（明日から頑張ろう）

もらったお金の重みに、ラミーは改めて身のひき締まる思いだった。

×

翌朝から道具屋の営業は再開した。

と言っても、店の跡地に木製の架台を置き、その上になけなしの商品を並べるだけの、なんとも寂しいスタートだった。

（お弁当の出張販売みたい）

アリアハンの城でも、門のところで衛兵相手に弁当を売るオバちゃんたちの姿をよく見かけた。

「じゃあ、おれは医者んとこへ行く。店番の方は頼んだぞ」

「はい。行つてらっしゃい」

杖を突いて村はずれの医者元へ通うバツドンを見送ると、ラミーは頬をぱしばし叩いて気合いをこめなおした。

ラミーが立っていると、周囲の住民たちが集まってきた。みんな、道具屋が放火に遭ったことを知っていて同情的だった。

「大変だったねえ」

「負けるんじゃないよ」

などと口ぐちに激励の言葉をかけては、聖水や革の帽子などを買
っていつてくれる。彼らには不必要な品なのに、地元のよしみで購
入してくれたのだった。

とはいえ、それも最初の数時間くらいで、正午をまわる頃になる
と、ばったりと客足が途絶えてしまった。

「どうぞ、寄っていつてください」

ラミーが勇気を振り絞って呼び子をするが、なかなか購入へと結
びつかない。たまに足を止める冒険者があっても、またすぐどこか
へ去って行ってしまう。

それもそのはず、道具屋における一番の売れ筋商品が品切れ中な
のだ。

「薬草がないとぜんぜんだなあ」

ラミーは嘆息した。

多くの冒険者は、薬草や毒消し草、目当てに道具屋へ寄る。

なのに、その肝心の草類が売り切れでは、まるで商売にならな
かった。

火事の消火活動で、在庫の薬草がすべてだめになってしまった。

他所から在庫を取り寄せようにも、今の時期はどこも薬草の在庫が
少なく、よそにまわす余裕がなかった。

「どうぞ、見てつてください」

一日中、声を漕らして大声で客を呼んだが、奮闘努力の甲斐も空
しく、その日売れたのはごく少数の聖水と革の帽子のみだった。

「……そうか。まあそうだろうな」

帰ってきたバッドンは、ラミーからの報告をきいて肩を落とした。
ある程度、予想はしていたが、ここまで売れ行きが鈍るとなると
大ごとだ。

薬草なしのままでは店の評判に影響するから、なんとしてでも薬
草を仕入れる必要がある。

「雨期前のこの時期は、どこも薬草が不足しがちなんだ。あと二ヶ
月、いや一ヶ月もすると供給が安定するんだがなあ」

暦表を見てバッドンがうめく。

どのみち、主力商品なしでは先行きは暗い。どうにかして、薬草を集めるか、薬草に代わる主力商品をつくる必要があった。

「薬草の自生地から採取は出来ないの？」

「難しいだろうな。自生地の大半は、アリアハンの有力商会在牛耳ってるからな」

「そうなんだ……」

薬草なんてたかが草なのだから、どこにでも生えているとばかり思っていた。だが、実際はその自生地は限られているし、採取した複数の草を調合する技術も必要だ。

なので自前で薬草を作る、となるとどうしても小売店主の手に余るのだった。

「まあ、おれは商売仲間のつてでなんとか在庫をかき集める。その間の店番は頼んだぞ」

「うん、任せて！」

力強く胸を叩く。

今のラミーに出来るのは、店番で精一杯声を張りあげるくらいだ。それならひとつでもふたつでも多く他の品を売るしかなかった。

x

それからの五日間、道具屋の売り上げは散々たるものだった。

多い日でも、聖水の販売本数は十二、三本がやっと。少ない日は一本も売れないことすらあった。

それに比べると、薬草の人気は抜群で、バッドンがやっとの思いでかき集めてきた薬草も、店に出すとももの数時間で完売した。

（やっぱり薬草なんだ）

たったの8G。

その売り上げが店の六割から七割を占めるといふのだから大したものだ。

倉庫にあった数ヶ月分の在庫が、一夜にしておじゃんになったバツドンの無念さが、ラミーも身にしみて実感できた。

ラミーがレーベ村に到着して、ちょうど一週間が経ったある日。彼女はいつものように店で売り子をしていた。

（今日で一週間、もっと頑張らないと）

そう決意するものの、口からはため息ばかりが出る。

この一週間でだいぶモチベーションが低下した。薬草を求める客に、品切れを告げるのが辛かった。怒鳴られるのはまだいい方で、無言で失望される方がよほどつらかった。

そんな日々だったから、突然目の前に現れた少年の姿に、すぐには気づかなかった。

「はあ……いらっしやいませ」

「ずいぶん元気ないね」

「あっ」

慌てて顔を上げる。

案の定、旅着姿の勇者だった。

遠征から戻ってきたのか、全身埃まみれだ。顔や手足は拭っているが、ところどころ鎧に緑や青の血がこびり付いている。魔物の返り血を浴びたのだった。

「ここで働いてるってきいて来たんだ」

「そうだったんだ」

「きみ、道具屋の店員だったんだね」

「色々あって、父の知り合いの店を手伝ってるの。ほんと、客商売って大変」

ラミーがしかめっ面をする。

客が来る気配もなかったので、しばらく二人で世間話をした。

ラミーと別れたあと、勇者たちは岬の洞窟へと潜った。洞窟経由で海底を渡り、ナジミの塔へと向かったそうである。

「けど、デアゴの魔力が途切れちゃってね。それ以上進むのは危険だったから、途中で遠征を切り上げて戻ってきたんだ」

いくら勇者とて、回復手段がなくては長期的な戦闘は難しい。デアゴから癒しの呪文を習い、どうにか自分自身でホイミを唱えられる程度にはなったが、まだまだ力不足らしかった。

「だから、次こそナジミの塔を攻略するために、薬草を買いこんでおこうと思ってね。せっかくだから、きみのところで買おうと思ったんだけど……」

「あつ」

ラミーの表情がさつと曇る。

「……ご、ごめんなさい」

「どうしたの？」

「薬草、今売り切れなの」

火事で在庫を焼失し、薬草が品薄になってしまっていることを正直に話した。

「そつか。なら仕方ないね」

「本当ごめんなさい。お役に立てなくて」

「そんなに気を落とさないで。きみが悪いわけじゃないんだから」
勇者が慰めてくれたが、ラミーはじつとうつむいて木靴のつま先を見つめた。

命の恩人に、薬草を売ってあげられないのがもどかかった。それが遠因となって、手傷を回復できず、志なかばで戦死してしまうことだってあり得るのだ。

（また迷惑かけちゃってる）

自分のせいではないと知りつつも、なお忸怩たる思いを隠せない。せめて一度くらいは勇者の役に立ちたかった。

「つ、次までには、必ず薬草を仕入れてきます。勇者さま、いつまで村に居ます？」

「うーん……そうだな。二、三日は休養する予定だよ。数年にわたる長旅だから、あまり無理はできないしね」

二、三日。

薬草を集めるにはあまりに短すぎる時間だった。バッドンほどのやり手でさえ、ごく少量の薬草を集めるので手一杯なのだ。ラミーの手に負えるような仕事ではない。

けれど、今を逃したら二度と勇者の役に立つことは出来なくなる。遠く異国へ旅立つ勇者のために、餓別としてぜひとも薬草を持って行ってもらいたかった。

「分かりました。旅立ちの前までに、必ず薬草をお届けします!」

「うん、じゃあそれまで待つてるよ」

「ぜ、絶対用意するから!」

少年が肯く。彼女が交わした根拠のない約束を、微塵も疑ってない。

その黒目がちな瞳で優しく見つめられると、ラミーの胸がとくと高鳴った。目を合わせようとすると、顔がかあつと火照って目の焦点がぼやけてくる。

（ち、違う。これはあくまで商売上の契約なんだから。別に、わたしはそんな……）

自分自身に言い訳をしながらも、胸のドキドキを勇者に聞かれやまいかと不安なラミーだった。

×

「薬草ねえ」

リズは革袋の水をごくごく飲み干すと、口からこぼれた分を拭いた。

「ありがと、美味しかったわ」

「どういたしまして」

ラミーは革袋を受け取る。中身は蜂蜜で薄く味つけをした水だ。

疲れているときに飲むと効果てきめんなので、非番の日はリズのために持っていてあげている。

「集落周辺で探すとなると難しいでしょうね。今の時期、手つかずで生えているところとなると、人里離れた山奥とかよね」

「危険、かな」

「危険なのは間違いないわね」

リズが布で汗を拭く。

早朝から、かれこれ二時間近く特訓に励んでいるので、全身汗だくだ。

この一週間、リズは午前中は訓練に励み、午後は宿屋の細々とした雑用（薪割りや、風呂焚きなど）をして宿代を浮かせていた。

「けど、あてはあるの？」

「あて？」

「ただ漠然と探したって、薬草なんて見つからないわよ。探すなら探すで、ちゃんと目星をつけておかないと」

「う」とラミーは押し黙る。

たしかに、なんのあてもないのに気安く請け負ってしまった。これで「薬草手に入りませんでした」では立つ瀬がない。

「貴女ってちよつと考えがなさすぎるわね。なおした方がいいわよ、その癖」

「面目ない……」

ラミーがうな垂れた。

「そうね。まずは、この辺りの地理に詳しい人に訊くべきでしょうね」

「誰か居る？」

「心当たりはあるわ。うちの宿屋の宿泊客で、レーベ村出身の子がいるの。彼女なら、薬草の自生地詳しいかもね」

「そうなんだ」

と、納得しかけて思わず首をかしげる。

レーベ出身なのに、どうしてわざわざ地元の宿屋に泊まる必要が

あるんだろうか。家で寝泊まりした方が安くあがるだろうに。

「どうする？ 会ってみる？」

「うん、お願い」

なんだか腑に落ちなかったが、せっかく紹介してくれるのだから会わない理由はない。宿屋に戻るリズに同伴して、さっそくその人物と会ってみることにした。

×

宿屋の二階の一角はドミトリーになっていて、狭苦しい部屋に二段ベッドが三台、押しこんである。

「うわ、汗臭い……」

ラミーが顔をしかめながら部屋に踏みこんだ。この相部屋は冒険者御用達なのか、甲冑や剣を立てかける専用の棚がある。だれかが吞んで暴れたのか、壁に大きな刀傷が刻みこまれていた。

室内を見わたすと、二段ベッドの上段から、特徴的な三角帽子がちょこんと覗いている。

「マリエ、ちよつといい？」

「うん？ なんだ」

男のような口調で返答がかえってくる。

魔法使いのマリエがベッドから顔を出した。

口にビスケット咥えて、片手に氷系呪文の魔導書を手挟んでいる。

「ああ、リズか」

「ねえマリエ、相談したいことがあるんだけど、今時間ある？」

「いいよ、こつちも退屈してたところ」

マリエは魔導書を枕の下へ押しこむと、はしごを使わないで飛び降りた。魔法使いのイメージとはほど遠いが、勇者の仲間ともなると、この程度はできて当然だ。

三人はラウンジに行くと、温かいラク茶を飲みながら話をした。
「前回の遠征で、バルダスが負傷しちゃってね。アリアハン脱出の前に無理はさせられないから、今は休養中。ホント、退屈で参っちゃっててね」

うんざりした様子で、頭の後ろで手を組んでラタンの椅子へともたれかかった。

「そんで、相談したいことって？」

「それなんだけど……」

ラミーが事情を話すと、興味をひかれたのか、マリエはぐつと身を乗りだしてきた。

「……へえ、うちの大将がね。あの人、案外苦労人だよねえ」

自分のパーティーのリーダーなのに、まるで他人事のような口ぶりだ。

「でも、薬草ないと困るでしょ？」

「ま、多少はね。けどうちはデアゴのおっさんも居るし、大将もホイミを覚えてたしで、なくてもなんとかなるんじゃないの？」

マリエにそう言われると、ラミーとしては少しむっとしてしまう。道具を軽視するのは、日頃魔法に頼りがちのスペルユーザーによくみられる傾向だ。

「でも、魔力が尽きたらあとは薬草頼みでしょ。なら絶対あった方がいいと思うな！」

「そりゃあ、ないよりはあった方がいいに決まってるけどさ……」
妙に気負って反論してくるラミーに、マリエは少しびっくりした様子で答える。

まさか、そんなに食いついてくるとは思わなかったので、意外そうな表情だった。

「けど、そうか、薬草の自生地か」

本題に戻ると、マリエはあごに手を添えて何やらとっくりと思慮に耽る。

「……うーん、ほこら周辺なら、以前は薬草が山ほど生えてたけど」

「心当たりがあるの？」

「あるにはある」

と十四歳の少女らしからぬ、ぶっきらぼうな口調でマリエは言った。

そこはレーベから数時間ほど離れた場所にある、森の中のほこらだった。ほこら周辺はバブルスライムや蠍蜂などの厄介な魔物が棲息しているため、村人たちも滅多に立ち寄らない危険地帯である。

「あそこなら、たぶん今の時期でも薬草が生えてるな。水源に近くて水が豊富だから」

「じゃあ、行ってみる」

「おい、人の話聞いてたのか？ 毒持ちの魔物がうようよしてるんだぞ」

「毒消し草ならあるよ」

「……おまえ、毒浴びたことないな？ 毒喰らうとな、死ぬほどつらいんだぞ？」

毒を浴びた者は、毒消し草が効くまでのあいだ、凄まじい苦痛を耐えなくてはならない。全身に筋肉がぎしぎし萎縮するほどの、猛烈な吐き気や悪寒をこらえるのだ。

「戦闘訓練も積んでない一般人が耐えるような、生やさしいモンじゃないぞ？」

「大丈夫。我慢できる」

さんざん脅されてもまるで動じないラミーに、しまいにはマリエも毒気を抜かれて苦笑した。

「……おねーさんたちって、ほんと変わってるな」

「あたしも？」と一緒にされたリズが不満げな顔をする。

「分かった。この私が案内してやる」

「良いの？」

「ああ。けどその代わり、どんな目に遭っても泣きごと言っなよ。それが条件だ」

「もちろん！」

ラミーは満面の笑みでうなずき、マリエの手を掴んだ。以前のラミーなら絶対しないようなスキンシップだ。

ここ一週間で、引っこみ思案だったラミーの性格は激変した。身につけるものや読書によって人の性格は変わってゆくものだが、ラミーの場合、勇者とのふれ合いによって性格が明るくなった。

「よろしくね、マリエ」

「な、なんかやりにくいな……」

ひねくれ者のマリエからすると、頑張り屋となったラミーは苦手なタイプなのだ。

その5

翌朝早く、三人は宿屋を出発した。

その日はあいにくの曇り空で、強い風が森の中を吹き抜けた。目に埃が入って、ラミーはごしごしと強く擦った。

（母さん、元気にしてるかな？）

たったの一週間そこそこで、早くも里心がついてくる。

未練がましい気持ちをはなぐり捨て、ラミーは旅人の服のマントをひるがえした。

（けど、この武器で大丈夫なのかな？）

冒険をするにあたって、昨日のうちに装備を調えた。道具屋のアルバイトで小金が貯まったので、そこそこの装備品ならなんなく揃えられた。

が、

「こ、これ重い……」

武器屋でこん棒を手にした瞬間、あまりの重さに床に取り落としそうになった。

せつかくだから、ひのきの棒からランクアップしようとしたのだ。一角うさぎ戦で、バルダスが容易く振りまわしているのを見て、自分でも扱えるのではないか、などと思ったのだが……

（こ、こんなの無理ムリ！）

とてもラミーの細腕では扱え切れない。

仕方なく、マリエとお揃いのブロンズナイフを購入した。

「武器なんてのは、自分の身の丈に合ったものを装備するのが一番だ。無茶したって、武器に振りまわされるだけだからね」

「けど、マリエは魔法が使えるけど、わたしなんて何も出来ないし……」

魔法使いとおなじような軽装備しかできない自分が恨めしかった。これでは前回みたく、足手まといになってしまう。

「なら、これで相手の攻撃を防ぐってのはどう？」

そう言っただけでマリエが寄越してくれたのは、単なるお鍋の蓋だった。「これ、うちの宿屋のオバちゃんのところから借りてきたんだ。軽いから、ラミーでも持てると思うよ」

「ださっ」

「文句言わない。攻撃力が低くても、相手の攻撃を受け止めることくらい出来るだろ。仲間の盾になるのだって立派な戦術だ」

年下のマリエにじと目で諭される。

そう言われるともっともだが、お鍋の蓋を構えて戦う自分の姿を想像すると、どうにも煮え切らないラミーだった。

「リズはいいなあ、その服」

ラミーは羨ましの目でリズを見る。

リズもボロボロの布の服から、新品の稽古着に買い換えた。

やっぱり女の子なのか、新しい服が嬉しくてくるっと一回転する。

「どう、この稽古着、似合ってる？」

「うん、とっても。私のお鍋の蓋はどう？」

「……うん、まあ、いいんじゃないかしら」

お鍋の蓋を装備したラミーに、リズは言葉を濁した。

相手を傷つけまい、という気遣いが相手を傷つけることもある。

とはいえ、これですいぶん装備が固まった。

回復役がない（デアゴはガールハントと称して村の酒場に行ってしまった）のが不安材料だが、近場への冒険なので、なんとかないと判断した。

「じゃあ行くぞ」とマリエが出発の声をあげた。

朝霧に煙る森の中を、三人の少女たちは勇躍突き進んだ。

アリアハンからの旅と違い、今回は片道数時間の行程だ。どんなに遅くなると、夕方前には必ず戻れる。

今回の調達で一番守備力が上がったラミーを先頭に、後ろからリ

ズとマリエがつづく。

「戦闘が始まったら、私がサポートしてやる。だから安心して戦いな」

「サポート？」

「そんな不安そうな顔をしなさんな。痛くはしないから」

意味深な含み笑いに、ラミーは不安になる。

歩きはじめて三十分ほど経ったとき、最初の敵と出くわした。

蠍蜂、と呼ばれる飛行型のモンスターだ。群れで行動する習性があり、数匹が檜の木の枝から飛びかかってくる。

「防いで！」

とマリエが叫んだ。

ラミーは腰に吊したお鍋の蓋を掴み、ぐっと防御態勢を取る。

「スカラッ！」

マリエが、素早く呪文を唱えた。

ラミーの肉体が淡い光で包まれ、一時的に固さを増した。

（うわ、凄い）

自分の肌が、なめし革のような固さになったのを見てラミーは驚嘆した。刺で刺されようと、爪で引つ搔かれようと、ほとんど皮膚に傷がつかない。蠍蜂たちは、やっきになってラミーを突き刺そうと群がってくる。

「ふん！」

とラミーはお鍋の蓋を突きだし、蠍蜂の攻撃をはじくと、ブロンズナイフで蟲の頭を吹き飛ばした。体液を迸らせながら、頭をなくした胴体のみがふらふらとあさつての方向へ飛び去ってゆく。

「やるわね！」

リズが冷やかし半分に褒めると、こちらも目にも止まらぬ速さで蟲の懷へ潜りこみ、まわし蹴りを叩きこんだ。鋭い痛打を浴びた蠍蜂が次つぎと地面へ落下する。

「ヒャド！」

地面でもだえる蟲めがけて、マリエがヒャドの呪文を唱えた。

手のひらの上に出現した無数の氷の刃が、敵めがけて飛来する。氷で全身をずたずたに切り裂かれ、蠍蜂たちは動かなくなった。

「緒戦としては上出来ね」

リズが軽く呼吸を調える。

ラミーにしても、マリエの加護があつてほとんど無傷である。

「ま、こんなもんだ」

三角帽子のずれをなおし、マリエがクールな一瞥をくれる。

「けど、急いでここから立ち去らないと」

「どうして？」とラミーは尋ねる。

「斥候の蟲が死んだのを知ったら、群れの本体が集まってくる。数匹ならともかく、二、三十匹で襲ってくるとなると、私たちだけでは戦い切れなくなるからな」

「そう、じゃあ急いで離れましょ」

ラミーたちは身体に付着した蠍蜂の体液を拭くと、その場から立ち去った。

×

途中、マリエの機転で小川の中で体液を洗い流した。

においを消されると、蠍蜂の単純な追跡能力ではそれ以上追えなくなるのだ。

三人は下着姿になると、そのまま水の中を進んだ。

（マリエって、どうしてこんなに色んなことに詳しいんだろ？）

前に行く小柄な少女の知識量の豊富さがふしぎだった。

知識なくしては魔法使いは務まらない、と言われてしまえばそれまでだが、それにしだって十四歳の少女とは思えない。

「マリエのご両親は、どんな方なの？」

「……どうしてそんなこときくんのだ？」

「えと、なんとな——」

「死んだよ。親父の乗った船が嵐で沈んでさ。お袋はそれを悲しんで、私を産んですぐ身投げしたんだ」

ラミーの言葉をさえぎって、さらにと衝撃的な発言をした。

マリエの瞳に、暗く沈んだ仄暗い情念のようなものが浮かびあがる。

何か、覗いてはならない深淵を垣間見たような気がして、ラミーはぞくつとした。

「ごめん、辛気くさい話しちゃったね」

「あ」

「今のなしね。忘れて」

マリエは普段の口調に戻ると、水浴びでぬれた髪を拭うべく、布きれで顔を隠した。

×

特訓をしたリズと、マリエの攻撃呪文の前には、たいていの敵は相手にならなかった。一行は次つぎと並みいるモンスターを撃破し、森の奥へと分け入った。

道なき道を進んでゆくと、やがて視界がひらけて泉のほとりへと到着した。

「静かなとこだね」

ラミーが泉の水面を覗きこむ。

透き通った水底に沈澱した泥がみえる。それをかき乱さないよう、注意して手で掬い飲んだ。

「ぶはっ、美味しい」

「生水飲むとお腹壊すわよ」

「平気だよ。だってこんなに澄んでるし」

「野外では水は煮沸して飲むのが常識だ。渋り腹を抱えて魔物と戦えないからな」

二人から責められ、ラミーはしゅんとする。

泉の周辺には、地下洞窟へ通じる穴ぐらと、ほこらが見える。どうやら、以前は何かの宗教的な施設だったらしく、ほこらの壁には古代語の象形文字が刻んであった。

「うわ、なんだろこの文字？」

「どうやら、このほこらはアリアハン建国以前の遺跡みたいね」

「リズ、読めるの？」

「読めないわよ。けど、古代文字なのは分かるから、数百年くらい前の建造物なのはたしかね」

「ふっん」

ラミーはほこらの壁に手を当てる。

内部から、何やらふしぎな波動のようなものを感じる。中に入ってみようとしたが、奇妙な形状の鍵がかけてあって、扉が開かなかった。

「あっちの洞窟は？」

「アリアハンの地下洞に通じてる」

今度はマリエが答えた。

「地下洞？」

「アリアハンの地下には巨大な空洞がある。鍾乳洞、と呼ばれる天然の洞窟と、それに接続するための人口の洞窟が大陸を縦横に貫いているんだ。常識だろ？」

常識だろ、と言われても、ごく標準的なアリアハン市民は、そんな地下道に行く機会など一生訪れない。

やっぱりマリエは少し変わってるな、とラミーは思った。

なんでも、この一週間、勇者たちは地下道の調査を行ってきたらしい。

古文書によると、ナジミの塔へ通じるルートが、膨大な地下道のどこかに存在するそうである。

「ほら、薬草要るんだろ。自生地はそっちの方だよ」

マリエに案内され、ラミーは泉のほとりの草むらへと分け入った。
「すっごい！ 薬草だらけ！」

思わず昂奮した声が出てしまった。

その一帯は、人の薬に立つ草ばかりが生え揃っている。薬草の原材料となる各種ハーブから、毒消し層や満月草、この大陸ではほとんどお目にかかれない弟切草まである。

「これ、摘み放題だね」

「だからって、全部摘んではだめよ。少しは残しておかないと」

「うん、それくらいの節度は弁えてるよ」

リスとラミーは、屈んだ状態で目を皿にしながら草を探して摘んだ。編みかごの中へほとんどん入れて行き、小一時間もすると、かごの中が満杯になった。

「これくらいあればじゅうぶんね」

「豊作だったね！」

二人とも頬を赤くして歓び合った。

マリエは離れた場所でかみ煙草を口に入れ、くちやくちや咬みながら、大あくびをして辺りを警戒している。

採取に夢中な二人を狙って、どこから魔物が襲ってこないとも限らない。魔物どもは、人間の油断を衝くのが上手だ。

「……案の定、か」

マリエが森の暗がりへ鋭い視線を向ける。

彼女の鋭敏な神経が、闇にひそむ何かを見抜いたのだった。

「気をつけて。何者かの気配がする」

そのひと言で、二人は瞬時に戦闘態勢を取る。

背中合わせで互いの死角を補うと、泉の周辺へと油断なく視線を這わせる。

「そこか」

マリエが茂みの中に潜む存在に気づく。。

とっさに口の中でメラの呪文を詠唱しはじめる。

が、彼女が火球を放つより早く、噎れた老人の声が湖畔にこだました。

「マホトーンッ！」

魔封じの術がマリエの華奢な身体を包みこんだ。

瞬間、マリエの魔力が封じられ、唱えかけの呪文がしゅると消失した。

「だれかれ構わず魔法を撃つとは、物騒なおなじやの。てんで駄がなつとらんわい」

そう言つて顔を出したのは、齡七、八十くらいの老人だった。胸まである立派な白ひげを撫でながら、老人は三人の前に進み出る。「タバコを咬んでいると、呪文の詠唱が遅れるぞ。おまいさんの師匠は、そんなことすら教えてくれなかったのか？ やれやれ、最近の魔法使いときたら」

「……じじい、何の用だ」

マリエは忌々しく吐き捨てる。

老人がかなりの使い手なのは明らかだ。

マリエがメラを唱えだした瞬間、カウンターでマホトーンを唱えた。

相手の詠唱速度が速すぎて、まるで対応できなかった。

「じじいとは穏やかではないの。わしの畑を勝手に荒らしておきながら」

「えっ、じゃあこの薬草は？」

「左様。これらの草花は、わしが修行のかたわら、趣味で育てていたものじゃ」

老人はにっこりと微笑する。

「はっ。畑の境界もないのに、所有を主張されたって困るね。それとも、私らを泥棒扱いして王宮までしょっぱくつてか？」

魔法を封じられた悔しさからか、マリエが絡んでくる。

「マリエ、悪いのはこっちなんだから」

リズがたしなめる。

知らなかったとはいえ、他人の畑の収穫物を奪おうとしたのはたしかだ。

かこの中の薬草を返そうとすると、老人は手を振ってそれを拒んだ。

「なに、そこのお嬢ちゃんの云うことももつともじゃ。ここはだれの土地でもない。おまえさんたちがご所望なら、好きに持って行くがよい」

「いいんですか」

「構わんよ。入り用なんだろう？」

「はい、どうしても必要なんです！」

ラミーが真摯に訴えると、老人はどうぞどうぞ、と手つきで勧めてくる。どうやら、たいして物に執着はないようだ。

「爺さん、何者だ？」

マリエが鋭く老人を睨んだ。

「なに、単なる隠居した老いばれじゃよ」

ほっほ、と老人は朗らかに笑うと、老人は泉のほとりに腰をおろした。

「こんなところで何してんだ？」

「修行じゃよ」

「修行？」とラミーが横から尋ねる。

「あのほこらへ入るための修行じゃ」

そう言うと、老人は古びたほこらの入り口を指さした。先ほど、ラミーが開こうとして開かなかった扉がある。

「わしはな、長年、魔力を用いてあの扉を開こうと努力してきたのじゃ」

「うん？」

よく意味が分からない、というような顔をするラミーに、老人はやさしく教えてくれる。

「お嬢さんは、アバカムという呪文をご存じかな？」

「アバ……カム？」

「究極の解錠呪文だ。この世にある、すべての扉を開くことができるとされている。今じゃ使い手が途絶えてしまった、古代の超高位呪文のひとつだよ」

マリエがそう補足説明した。

「そう。わしはその呪文を習得し、この扉を開くことに長年、血道をあげてきた。かれこれ四十年近くものあいだ、な」

「四十年も？」

思わずびっくりした声が出る。

十六年しか生きてないラミーの、二倍以上の月日を、老人はここで修行に明け暮れているというのだ。

「けど、見たところ扉は開いてないようだけど？」

マリエが冷たくひやかした。

「左様。わしの魔法の才能では、ついぞアバカムを習得することは叶わなんだ。素質とは、まこと残酷なものよなあ」

そう言って老人は自嘲気味に口をゆがめる。

武芸以上に、魔法の世界は生まれ持った素質がすべてだ。

世の魔法使いの八割近くは、ヒヤダルコ習得前後でその生涯を終えることになる。魔法が高度になればなるほど、ひとつひとつの習得に多大な時間を要するためだ。

「でも、待てよ。爺さんさっきマホトーンを使ってたよな。もしかしてあんた……賢者なのか？」

「さあて、何のことやら？」

老人は耳が遠くなっただりをしてごまかした。

僧侶の呪文であるマホトーンを駆使しながら、魔法使いの呪文であるアバカム習得を目指すこの老人は、伝説の賢者である可能性が高かった。

「爺さん、あんたどこで悟りを開いた？」

「ほっほ。近ごろ物忘れが激しくての。そんなむかしのことなど、忘れちゃったわい」

「おい、とぼけるな！」

「おお、怖いおなごじゃ。年寄りをいじめんでくれい」
そう言つてごまかし、あとはマリエからどんなに質問攻めにされ
ようと、のらりくらりと受け答えをかわすのみだった。

その6

そろそろ昼食の時間だったので、ラミーたちは老人と一緒に昼を食べた。

焙り肉を挟んだパンや、青かびチーズなどの簡単な食事だったが、老人は「旨い旨い」と喜んで食べてくれた。

「ねえおじいさん、あのほこらの中には何があるの？」

「さてな。わしもよくは知らん」

「……知らないのに、扉を開くために何十年も修行してきたの？」
ラミーは思わずっこけそうになる。

「逆じゃよ。知らないからこそ、中に何があるのかを知りたくなる」

「未知への挑戦ですよ。あたし、分かりますそれ」

妙にロマンチストなところのあるリスが食いついてくる。

おお、あんたも男の浪漫が分かるか、と老人と意気投合しだした。

「へっ、おめでたいね」

マリエは小声で吐き捨てる。

老人とうまが合わないのか、離れたところでちびちびと蜂蜜入りの水を飲んでいる。

「ほほう、勇者のために薬草をとな」

「はい。おじいさんのおかげで、なんとか全部揃いました」

「うむ、立派な行いじゃの」

孫娘の善行を見るような慈愛に満ちたまなざした。

ラミーとしては、なんだかこそばゆくなる。

（でも、これで薬草の原材料は揃った）

しかし、今はまだ単なる草の状態だ。あとは薬の調合ができる人物を探しだし、依頼しなくてはならない。

「ねえリス、この辺りに薬草の調合できる人って居るのかな？」

「そうねえ。一度アリアハンまで戻らないと難しいかもしれないわね」

「そっか……」

これからアリアハンに戻って、薬草の調合を頼み、それを持ってレーベに舞い戻る。

果たして期日までに勇者に薬草を届けられるだろうか。今さらながら、ラミーは自分の見通しの甘さに気づかされる。

必死にアリアハンまで戻った方がいいものの、薬草の調合に手間取って、勇者の出発に間に合わなかったら目も当てられない。

「薬草の調合なら、レーベにも錬金術師のジジイが一人おったはずだぞ」

「ほんとに？」

「ああ、わしの古い友人じゃが、相当な偏屈者での。『おれは魔法の玉を完成させてみせる』などと息巻いて、数年前に自分の家に鍵をかけて閉じこもっちゃった」

「偏屈仲間か」とマリエが半畳を入れた。

「ま、そんなようなものじゃな」

老人は何々と笑うと、ローブの裾を捌いて立ちあがった。

「さて、わしはそろそろ行くが、良かったらおまえさんたちをレーベまで送ってやらんこともないぞ？」

「うっん、大丈夫。わたしたちだけで戻れるから」

「そうかの。では達者でな」

そう言って老人は目を閉じ、もごもごと口の中で呪文を詠唱した。
「ルーラッ！」

と次の瞬間、老人の肉体は空高く飛翔し、蒼天の彼方へと消え去った。

瞬間転移の呪文を使用したのだ。

「行ってしまったわね」

リスが啞然としてつぶやく。

「……転移呪文で行くんなら、そう言ってくれたら良かったのに」

「あの糞ジジイ、ほんと気が利かないな」

マリエが悪態を吐く。

「ねえラミー。キメラの翼はないの？」

リズが思いだした様子で尋ねる。

キメラの翼は、ルーラとおなじような瞬間転移を可能とする魔法の道具だ。これがあれば、レーベまで瞬時に戻ることができる。

「ごめんね、今は持っていないの……店の在庫が少なくて」

薬草ほどではないけれど、キメラの翼も店の人気商品だ。本当は一、二枚懐へ忍ばせて来たかったのだが、ただでさえ少ない在庫を私用で消費するのは憚られたのだ。

「なら仕方ないわね。急いでレーベまで戻りましょう。今なら、まだじゅうぶん時間はあるもの」

老人の言っていた錬金術師、とやらにだめもとで調合を依頼してみる。

万がいち断られたら、バッドンに頼みこんで貴重なキメラの翼を売ってもらい、アリアハンまで飛んで戻る。薬草を入荷するためなのだから、その程度の利用ならバッドンだって認めてくれるだろう。そのように今後の見通しを立てたところで、一路レーベに帰るところにした。

×

食事のお礼として、三人とも老人からホイミの呪文をかけてもらったので、体力は満タンだった。

途中、大がらすと一角うさぎの群れが現れたが、この頃になると三人の呼吸が合ってきて、大群で襲われても怯まなかった。

ラミーが盾を構えながら突進し、戦闘のモンスターの攻撃を受け止める。そうして隙を窺いながらブロンズナイフを突き刺した。

「ギョヘエツ！」

ナイフの一閃で羽根をばつさりと斬られ、大がらすがきりもみ回転で落下する。

たび重なる戦闘で感覚が掴めたのか、ラミーもそこそ敵を仕留められる程度にまで成長した。

戦うラミーの左右には、次つぎとモンスターに飛び膝蹴りを浴びせるリズや、ヒヤドを唱えるマリエの姿がある。

十匹近い大群だったが、三人の絶妙な連携プレーのおかげで楽勝だった。

「へえ、だいぶやるようになったね」

「そうかな？」

「うん、一般人にしちゃ出来だよ。意外と訓練したら戦士になれるんじゃないの？」

「まさかあ」

アリアハンの城下町で女戦士を見たことあるが、みな筋骨隆々とした大柄の女性ばかりだ。とてもラミーでは務まりそうもない。

立ちはだかる敵を蹴散らし、行程の途中まで到達したところで、一行は小休止を入れた。

「村まであと少しだが、一度休むか」

「う、うん」

マリエに言われるまま、ラミーは大人しく切り株に腰をおろした。案の定、基礎体力の点でほかの子たちと差が出てしまう。

リズに敵わないのは当然だが、後衛職のマリエですらラミーの数倍は鍛えている。

二人とも一時間以上、動きっぱなしなのに、汗すら掻かず爽やかだ。

（やっぱり、わたし戦い向いてないんだな）

噴き出す滝の汗を拭いながら、ラミーはしみじみそう思った。

素質がないのは分かっていたけど、優れた冒険者とパーティーを組むと、それをまざまざと痛感させられる。

（ああ、くたびれた。二人にはわるいけど、もう少し休憩して——）
ラミーが空を仰ごうとした刹那、樹上から何かが落下してきた。
「うわぶっ」

どろっとした半液体状の緑色の物体が、顔面を覆い尽くした。
つんとする刺激臭。

口や鼻腔に流れこんでくる障気。

（これは、バブルスライム？）

怖気をふるって払いのけようとしたが、即効性の毒が神経系に作用したのか、手足が痺れてろくに力が入らなかった。

悲鳴を上げようとしても、気道を塞がれて声が出ない。

そうこうするうちにも、口腔内へアオコのような腥い粘液が流れこんでくる。

（た、助けて……）

ラミーは道具カバンに手を入れ、聖水の壺を探り当てると、蓋をはずしてバブルスライムに濯ぎかけた。

「ぴぎー！」

とスライムの口から悲鳴があがる。聖別された水を浴びると、スライムのような弱小モンスターは火傷に似た傷を負うのだった。

その声に、二人が駆けつけてくれた。

リスが素早くバブルスライムを引きはがし、木の幹めがけて叩きつける。

「ラミーッ！」

リスが抱き起こすと、ラミーは苦しげに口をぱくぱくした。
しこたま毒を吸入したせいか、顔面が死人じみた青白さだ。

「やばいぞ。毒が全身にまわってる」

マリエが毒消し草を口移しで飲ませたが、体力の消耗が激しく、草が効く前に重篤になりそうな気配だ。

「くそっ、キアリーさえ使えりゃあな」

僧侶のキアリーなら、毒消し草より速やかに全身の解毒が出来る。
「デアゴさんは？」

「レーベまで戻れば……」

二人はうなずき合った。

ここで仲間を見殺しにはできない。

リズがラミーを背負い、マリエがしんがりを務める。二人とも、最低限の荷物以外を捨てると、レーベめがけて疾走した。

「魔物が出たら即逃げるぞ！」

いちいち一戦交えていたら、ラミーの体力がもたなくなる。

出会った敵に背を向けるのは、二人にとっても危険な行為だ。無防備な背中から追撃を受けるし、その分、手傷を負いやすくなる。

だが、今はラミーを運ぶのが最優先だ。追ってくる魔物の群れをメラやヒヤドで蹴散らしながら、二人は全力で激走した。

ようやく村が見えてきた頃には、二人ともへとへとだった。

「ふう、死ぬかと思った」

すべての魔力を使い切って、全身傷まみれのマリエは村の入り口でしゃがみ込んだ。魔法を乱発しすぎて、体力まで奪われた。疲労困憊で片膝をつく。

「へへ、ざまないね」

顎から垂れる脂汗を拭った。

三人の異変を知って駆けつけてきたデアゴが、真っ青なラミーにキアリーの呪文を施した。

「一般人なのに、相変わらず無茶をしますなあ」

「おっさん、あんま胸触るな」

「ほほ、これは異なことを。キアリーを効率よくかけるには、胸部にじかに触れるのが一番なのですぞ」

などとして顔で胡散臭い理論を吐きながら、ラミーの胸に手をそえて詠唱する。

「ったく」

デアゴは工口坊主ではあるが、相手が本当に危険な状態のときに冗談を口にするような無神経な男ではない。

二人の必死の努力の甲斐あって、ラミーは危険な状態に陥らずに

済んだのだった。

「やれやれ、手間かけさせやがって」

「ほんとにね」とリズも応じる。

「けど、なんか憎めないやつだよ」

「ええ」

二人はくたびれ果ててお互いの健闘をほめ讃えると、棒きれのよ
うな重い足を引きずって宿屋へと帰投したのだった。

×

翌朝になって、ラミーは意識を取り戻した。ベッドの中でうつす
らと目を見開く。

（頭が割れそう）

毒は抜けても、そのダメージがなくなるまで時間がかかる。虚脱
状態のようになって、まるで動く気力が湧かなかった。

（そうだ、わたし毒にかかって……）

まわらない思考で、必死に記憶を掘り起こそうとする。

だが、頭を働かせようとすると、こめかみの周辺が強く痛んだ。

（もうちよつと寝よ）

諦めて枕に深々と埋めると、数分後には安らかな寝息を立ては
じめた。

×

「まだ意識戻らないんだね」

「ええ、余程疲れてしまったのかしらね」

こんこんと眠るラミーを、リズが心配そうに覗きこんだ。

顔色自体は良くなって、頬に赤みが戻ってきたから憂慮するほどではなかったが、どうしても気になるのが人情というものだ。

「まあ、しばらく寝りや目覚めるさ」

「……行ってしまうの？」

「ああ、そろそろアリアハン脱出に向けて本格的に動きださないと
な」

マリエは拳を固める。

「今、こうしてる間にも、魔王の侵攻は世界各地に及んでる。私らは、こんなところで立ち止まってるわけには行かないんだよ」

「マリエ……」

「リズ、短い間だったけど、あんたと一緒に冒険できて楽しかったよ。またいつか、一緒に旅したいもんだな」

「そうね」

「そんなときは、このネボスケも連れて三人で世界を見てまわろう。きつと楽しいぞ」

マリエはにかつと笑うと、すつと手をさしのべた。

二人は熱く握手を交わし、強くつよく抱きしめ合った。

x

窓辺から離れずめの啼き声がして、ラミーは目をさました。

窓辺から射しこむ朝日を見つめ、一瞬呆然としたが、たちまち強烈な律動を下腹部に感じ、厠に急行した。

（び、びっくりした）

目覚めた瞬間、膀胱が破裂しそうなほど辛く、猛烈に厠に行きたくて仕方なかった。こんなことは生まれて初めてた。

（どうしちゃったんだろ）

ベッドに腰をおろしてお腹の辺りをさすっていると、気配を聞きつけてリズが部屋に入ってきた。

「ようやく目を覚ましたのね」

「リズ！」

リズと顔を合わせたたん、直前の記憶が鮮やかによみがえってきた。

「そ、そうだ。わたし、バブルスライムの毒を浴びて、意識を失ってた……」

「大変だったわよ。あたしとマリエで、レーベまで担いで運んだんだから」

「ご、ごめん」

また迷惑をかけてしまった。

自己嫌悪の雲がむらむらと胸の奥からわき起こってくるが、それを振り払うと、

「わたし、どのくらい寝てたの？」

「まる二日間ね」

「そんなに？」

思わず仰天した。

「薬草は？ 薬草はどうなったの？」

「それなのけど」

リズはベッドサイドに腰かけると、さも言いくそな口調で切り出した。

ラミーがなかなか目を覚まさないでいるうちに、勇者たちはナジミの塔攻略に向けて旅立ってしまった。

その間、リズは薬草を調査してくれる人を求めて方々を探し歩いた。

が、レーベ村に居るといふ錬金術師は、家に特殊な鍵をかけて閉じこもってしまっているし、アリアハンの商会付き薬剤師は、来月の中旬まで予約が埋まっているとかで、てんで相手にならなかった。「せっかく摘んだ薬草は萎びてきちゃうし、このままじゃラミーの

苦勞が無駄になると思つて、すごく焦つたわ」

「リス」

「そんなとき、勇者さまたちとアリアハンで偶然鉢合わせしたの」
リスがアリアハンのルイーダの酒場に戻つて、ルイーダと相談をしていると、勇者一行がやってきた。

なんでも、アリアハンの人たちに別れの挨拶をするため、一度キメラの翼で戻ってきたらしい。

勇者の母親やルイーダ、それにアリアハン王への定期報告も兼ねて、勇者たちは各地に挨拶まわりをしているところだった。

「じゃあ、ナジミの塔にある盗賊の鍵とやは手に入れたのね？」

「うん、なんとかね」と勇者は答える

勇者たちの目的は、レーベ村に住む変わり者の老人と会うことだ。盗賊の鍵さえあれば、その老人のかけた鍵を開くことができる。

「なんでも、その人がかつて、いざないの洞窟を封鎖した張本人らしくてね」

「封鎖？」とリスは怪訝な表情をした。

「今みたいに、闇が世界を覆い尽くす以前は、ロマリアとアリアハンは旅の扉で繋がっていたらしいんだ。旅の扉って知ってる？」

旅の扉、というものはリスも耳にしたことがある。

空間をねじ曲げることで、遠く離れた場所へ瞬時に移動できる装置だ。ルーラの転移原理を応用した古代文明の遺物らしいが、詳しいことはリスも知らなかった。

勇者いわく、バラモス以前、アリアハンとロマリアを結ぶいざないの洞窟は、頻繁に人の行き来があつたそうである。

しかし、世界各地のモンスターが凶暴化し、あちらこちらで都市や村が襲われる事件が相次いだことから情勢は一変した。

「ネクロゴンドのバラモスの軍勢が、各地を侵略しはじめたんだ。テドンをはじめとする、幾つもの街や国が魔王の軍勢によって滅亡させられた」

幸い、他の大陸から隔絶されたアリアハン大陸は、そうした兇暴

なモンスターの襲撃を免れることができた。

だが、旅の扉が繋がったままでは、いつなとき大陸のモンスターが流れてくるか分からない。

そこで、錬金術師の老人は 最後の旅人 として勇者オルテガを彼の地へ送りだすと、そのまま洞窟の入り口を魔法の壁で封鎖してしまった。

それからというものの、両国の陸路による行き来は途絶えたままだった。

「だから、僕はこれからその錬金術師に会って、壁を壊す方法を聞き出すんだ」

「壊せるの？」

「分からない。けど、壁を築いた張本人なら、きっと何か判ると思う」

そう言って勇者は微笑した。

「錬金術師…… そうだわ。あたしも一緒に連れて行ってもらえるかしら？」

アリアハンで薬草の調合を断られてしまった以上、あとはレーベのその人物を頼るしか道はない。これで錬金術師に断られたら打つ手なしだ。

リズは一縷の望みをかけて勇者と同行した。

×

「それで、どうなったの？」

ラミーはベッドから半身を乗り出して先を急かした。

「あたしたちが大挙して押しかけたら、錬金術師のおじいさん、びっくりしてたわね」

並みの人間では開くことのできない扉を開いたことで、錬金術師

の老人は啞然とした様子だった。

まさか、こんなアリアハンの片田舎に、わざわざ自分を訪ねてくる物好きが居るとは予想だになかったのだ。

「最初は半信半疑だったけれど、勇者さまがオルテガの息子だと知って二度驚いてたわね。なんたる運命じゃ、とか言ってたわ」

錬金術師の老人は、オルテガとの昔話を話してくれた。

アリアハンを守るため洞窟の封鎖を依頼したこと、共に酒を酌み交わしたことなどを懐かしそうに語る。

「それから、おじいさんは魔法の玉というものを出してくれたわ。なんでも、魔法の壁を壊せる唯一の道具なんですって」

一度封鎖した壁を破壊する。

そのリスクは当然、錬金術師の老人だってわきまえているはずである。

魔王の攻勢は日増しに強くなるなか、あえて頼みの綱である防御壁を捨てるのだから、一見無謀な作戦にみえる。

だが、勇者オルテガが火口に歿した今、世界を救えるのはその息子しかない。

老人はそう思い定めると、アリアハンを戦火に巻きこむのを覚悟の上で、いざないの洞窟の封鎖を破る手助けをしたのだった。

「勇者さま、魔法の玉を受け取ると、絶対世界を救ってきます、と言って旅立ったわ」

「行ってしまったの？」

「……ええ。あたしがおじいさんにその場で薬草の調合を頼んで、それを持って行ってもらおうとしたんだけどね」

勇者の冒険の役に立つなら、と老人は喜んで薬草の調合をひき受けてくれた。

だが、苦労の末に完成した薬草を、勇者は頑として受け取ってくれなかった。

「リス、君の気持ちは嬉しいし、それを断るのは申し訳ないと思ってる」

「ならどうして？」

「けど、ごめん。僕はラミーに頼んだんだ。だから、今は受け取れない。また戻ってくるがあったら、そのときに……」

義理堅い勇者は、断乎としてリズからの受け取りを拒否したのだ。
った。

「ああ見えて彼、頑固なところがあるから」

「勇者さま……」

ラミーは頭を振る。

せっかく苦勞して薬草を手に入れたのだ。そんなくだらない意地を張らないで、ぜひ持つて行って欲しかった。女の子に対して妙に義理堅いところは、勇者といえど十六歳の少年らしかった。

「……勇者さまがレーベを経ったのはいつぐらいなの？」

「今朝早くよ」

「今から追ったら追いつける？」

「……魔法の玉を設置して、発破をかけるには時間がかかると言っていたわ。彼らがいざないの洞窟に入る前なら、追いつけるかもしれないわね」

「じゃあ行く」

ラミーは瞳に強い決意をみなぎらせる。

「あのね、ラミー。マリエも言っていたけれど、勇者さまのパーティーにはデアゴさんが居るわ。いくら薬草がなくなっても、怪我を回復できなくなつて彼らが命を落とすことはないと思うの」

「分かつてる。分かつてるけど……」

ラミーはぎゅっと唇を咬んだ。

自分たちの行為が、勇者にとってたいした益にならないことくらい、百も承知だ。

けれど、

だけれど、もしかしたら、万がいちのとき役に立てるかもしれない。
い。

この薬草が、勇者やその仲間の命を救ってくれるかもしれない。

「わたしが道具屋の店員として、勇者さまにしてあげられるのは、これくらいだから」

「……ラミー」

リズはラミーを見つめ、少し嘆息した。勇者も頑固だが、ラミーもたいがい頑固者だ。

「まったく、しょうがないわね」

「ごめんなさい」

「ま、貴女ならそう言うと思ったわ」

リズは優しく肩をそやした。

「でも、覚悟しておいて。いざないの洞窟へ向かう山道は、危険なモンスターや邪教徒なんかがうようよしてるの。あたしたち二人で追って、無事追いつける保証はないわ」

「リズ、ありがとう」

ラミーは感極まって目をぬらした。

「こら、泣かないの。冒険者はそんなことくらいで泣いちゃだめ」
「うん」

目尻を拭くと、ラミーは決然としてベッドから起き上がった。

病み上がりで身体がふらふらする。

だが、以前より妙に身体が軽く感じられる。たび重なる魔物との戦いの中で成長したような気分だ。

「大丈夫？」

「少しふらつとするけど、何か食べたら元気になると思う」

宿屋のおかみさんから、パンとチーズを購うと、ラミーはそれを食べながら仕度をした。

×

バブルスライムの毒が染みこんだ旅人の服は、マリエが破いてし

まったので、旅立ちの前に、バッドンのもとで装備を新調した。

道具屋の奥にあったカメの甲羅、と呼ばれる軽量鎧を装備する。

巨大な海亀の甲羅をそのまま鎧として詠えたもので、見た目は不格好だが、軽くて丈夫な上、旅人の服の数倍もの守備力がある。

「ふふ、へんてこな恰好ね。お鍋の蓋とよく似合ってるわ」

「わ、笑わないでよ」

カメ甲羅の首の部分から顔を出して、ラミーは頬を赤らめる。

「ラミー、こいつを持って行きな」

バッドンが腰に吊した小ぶりなナイフを手渡してくれた。刀身に青白い光を帯びた神秘的な拵えの短剣だ。

「そいつは聖なるナイフって代物だ。おれが昔、ロマリアまで行商に行っていた頃に仕入れたもんだ」

「もらっていいの？」

「気にするな。おまえが大量の薬草を摘んできてくれたおかげで、在庫不足の方もどうにか乗り切れそうだ。こいつはおれの心ばかりのお礼だと思ってくれ」

ナイフを受け取ってかざしてみる。

手のひらに吸いつくような、冷えびえとした重みが感じられた。

「そいつなら、山岳地帯の危険なモンスターとも対等に渡り合えるだろ」

「おじさん」

「急ぎの用向きだろ。時は金なり。商人たるもの、限りある時間は一秒だって無駄にしちゃならんぞ。ほれ、勇者さまの役に立ってこい」

背中を叩かれ、ラミーはこくんとうなづく。

今までで一番危険な旅になるのに、怖じ気づくどころか、かえって勇気が湧いてくる。

アリアハンの自宅でごろごろしていた頃に比べると、われながら見違えるような気分だ。今なら、スライムや大がらすごときには、絶対負ける気がしない。

(必ず勇者さまに追いついてみせる)

何があるうと、どんな困難が待ち構えていようと前を向いて歩んでゆく。

そう心に固く誓うのだった。

その7

アリアハン大陸の北東の山岳地帯。その先にいざないの洞窟がある。

以前は頻繁に人の行き来があつたため、整備されていた山道も、今では荒れ放題に荒れ、登って行くのも一苦労だ。

ごつごつした鋭角の岩が転がる中を、ラミーとリズは進軍した。道はつづら折りになっていて、端で折りかえすたびに空が近くなる。山を登りはじめて一時間もすると、眼下の鬱蒼とした森にレーベ村の煙が見えてきた。

「雄大な景色ね。素敵」

リズが振りかえって目を細める。

ラミーも振りかえろうとしたが、その拍子によるけてしまった。

カメの甲羅のせいで、危うくそのままころころと麓まで転げ落ちそうになる。

「ちよつと、しっかりしてよ」

「面目ない」

ラミーは埃まみれで起き上がる。

気持ちだけはだれにも負けない自信はあつたが、病み上がりの体力不足は如何ともしがたい。断腸の思いで、用意してきた薬草を一つ口に含み、胃袋に流しこんだ。

「ふう、これでなんとか体力が持つかな」

「あまり無理しないでね」

「うん、平気。でも急がないとね」

なにしろ追いつくための強行軍だ。休憩時間ですら惜しい。勇者たちが洞窟に入ったら、その時点でそれ以上の追跡は不可能となるのだから。

「……雲が出てきたわね」

荷袋を背負いなおしながら、リズが眉間に皺を寄せる。

黒くどんよりとした雲が、西の空を覆っている。上空はかなりの風の強さなのか、みるみるこちらへ迫る勢いだ。

「この分だとじきに雨が降るわね」

「……道がぬかるんじゃうね」

「それくらいならいいけれど、崖崩れに巻きこまれないよう注意して。雨が降ると地盤が緩んで危険だから」

拳大の岩であっても、上から勢いよく降ってきたものは、豪傑熊の一撃並みに威力がある。細心の注意が必要だ。

そうしてさらに二時間ほど歩き、二人が山道の中腹に達したところで、天の雨戸を開くかのような驟雨に見舞われた。

「ラミー！ こっち急いで」

視界が白く染まるほどの集中豪雨の中、二人はしぶ濡れになりながら中腹にぼつかりと開いた洞窟へと走った。

ここは廃棄された坑道らしく、木枠で補強された天井から、火屋のひび割れたランプが吊してあった。車輪のはずされたトロツコなどが放置してある。

雨が流れこむのを防ぐため、坑道の入り口はひととき高く土が盛ってあった。ここなら身体を休められそうだった。

ラミーたちは洞窟の入り口で、軽く休憩をした。

「こんなところで時間を食って間に合うかな？」

「通り雨だから、すぐやむわ。それに今の貴女が冷たい雨で身体をぬらしたら、きっと動けなくなっちゃうもの」

リズの忠告に従い、留まることにする。

焦りすぎて倒れてしまつては、目も当てられない。

「心配しなくたって、勇者さまたちだって雨宿りをしてるわ。こんな雨の中、険しい山道を歩くのは危険すぎるもの」

狭苦しい隧道の壁にもたれて、二人は軽く食事を取った。

携帯用の固く焼きしめたクッキーと水。

慌ただしい出発だったから、用意できた食糧はその程度だ。

「はい、これ」

リズがクッキーを半分に割ってくれた。

手のひらほどある大判のクッキーを、二人で半分こにして食べる。

「ねえリズ」

「なに？」

「ひとつ訊いてもいい？」

「どうしたの。へんに改まったりして」

降りしきる雨の中、ラミーは薄い毛布にくるまって、顔半分を毛布に埋める。

「リズは、どうして勇者さまたちと一緒に行かなかったの？」

「……」

「勇者さまと一緒に冒険してみたいって、前に言ってたよね。どうして行かなかったの」

「……自信、なくしちゃって」

リズはあえてそっけなくそう言うのと、訝しがるラミーに分かりやすく説明した。

「マリエと一緒に貴女を運んだとき、あたしね、貴女が死んだらどうしようって、ずっと不安だったの。なのにマリエは、不安すら感じてない様子だったわ」

「そうだったんだ」

「そのときはマリエの冷静さが頼もしかったけど、後から思いかえしてぞっとしたの」

「ぞっとした？」

「彼女は、たぶんわたしたちが想像する以上に、たくさんの人の死を見てきたんだと思う。それこそ、凡人では生き残れないような状況を、何度も経験してるんだわ」

リズは暗い表情でそう語る。

自分とマリエではぐぐった修羅場の数が違いすぎる。

精神力から素養まで、二人とマリエとはすべてにおいて段違い

だった。

おそらく、戦士のバルダスにしても、僧侶のデアゴにしても、皆一様に自分の命を投げ捨てて戦う覚悟がある。世界を救う決意がある。

だからこそ、生きて戻れる見込みのほとんどない、魔王討伐の旅に自ら名乗りを上げたのだ。

「そう考えると、あたしじゃ力不足だと思ったの。武者修行がてら魔王討伐のお手伝いなんて、真剣な彼らに対して失礼だと」

「リス」

ラミーが何か言おうとすると、それを遮るようにして首を振る。

「……ううん、今は嘘。ほんとはね、死ぬのが怖かったの。勇者さまの旅に同行したら、あたしみたいな凡人じゃ、きっと生きてアリアハンには戻れない。そう思うと、怖くて怖くて、足が震えてしまったのよ」

「分かる。わたしもそうだから」

「武人のはしくれなのに、いざとなると尻込みしてしまうなんて、情けないわ。師匠が知ったら、きっとぶん殴られるわね」

リスが弱々しく微笑した。

（リスも、わたしと似てるんだ）

自分より数段強くて、目の上の存在だったリスに、強い親しみを感ずる。

ラミーがリスに負い目を感じるように、リスもまた、マリエのよくな超人的な相手には負い目を感じるのだ、と。

これまで一緒にやってこられたのは、きつとどこか似ている部分があったからなんだ、とラミーは思った。

お互い、胸にうじうじした気持ちを抱えながらも、それでも前を見て歩いていこうとしてきたのだ。

ラミーはぎゅっとぬれたリスの身体を抱きしめる。

驚いたリスの心臓がとくとく、と早くなるのを感じる。

「な、何よ、びっくりしたわ」

「リズ。貴女とお友達になれて良かった」

「ラミー……」

リズは言葉を詰まらせると、頬を熟した林檎みたく赤く染めた。
が、

ふと二人の目の前を、ひらひらとした物体が横切った。抱きしめ
合った二人は、とっさに離れる。

リズはもちろん、ラミーも瞬時に戦闘態勢を取れるまでに成長し
た。素早く腰に手を伸ばして聖なるナイフを抜く。

「人面蝶だわッ！」

坑道に入ってきたのは、おびただしい数の人面蝶の群れだった。
雨宿りをしようとして鉢合わせしたのか、魔物の群れも驚き戸惑っ
ている。

まずリズが真っ先に動いた。持ち前の素早さを活かして、素早く
飛び膝蹴りをかました。

びびび、と奇怪な音を鳴らして、人面蝶の顔面が潰れる。
悪臭のする体液が飛び散って坑道においが充満する。

が、ラミーも慣れたもので、少々悪臭程度ではたじろがない。
自らも混乱する蝶の群れに躍り出て、ナイフで羽根を斬り刻んだ。

「リズ！ 気をつけて！」

一番後ろの一匹が、何やら口をもぞもぞと動かした。牙の生えた
不気味な唇が動き、何やら呪文を詠唱する。

「マヌーサッ！」

人間の声を無理に真似たようなおぞましい声で、幻覚呪文を唱え
る。

狭い隧道内では逃げ道がなく、二人はたちまち深い霧に包まれた。
飛びまわる蝶の姿は薄い陰影として視認できるが、その中に幻覚
が混じっているらしく、なかなか攻撃が当たらない。

（つつ。迂闊だった）

蝶が容赦なく食いついてくる。牙自体の威力がないのと、分厚い
鎧のおかげでラミーは軽症だが、リズの負傷が著しい。全身を咬ま

れ、咬み傷から血が流れている。

「リズ、退いて！　ここはわたしが！」

「でも……」

「大丈夫、信じて」

リズを背後に庇いながら、ラミーは集中して目の前の蝶を一匹ずつ葬ってゆく。

幻覚が混じっていようと、いずれは必ず攻撃が当たる。しょせん、マヌーサは単なる目くらましだ。

（わたしは負けない）

リズは何度も何度も敵へと挑みかかった。

何度からぶって、何度噛みつかれようと、揺るがない。

疲れて手が上がらなくなっても止まらない。

不敵な笑みを浮かべながら、ラミーは咆哮を発して突撃した。

数十回目の攻撃で、ようやく最後の一匹を仕留めることができた。真つ二つにされた蝶の死骸を見つめ、ラミーは無言ではあはあと息を調える。

鎧はぼこぼこだし、手足は傷だらけで死ぬほど辛かったが、かつてない充足感だった。

「リズ、やったよ」

「かろうじて、ね」

そう答えるリズも、手傷を負ってくたぐた。幻覚で距離を見誤り、自慢の拳で隧道の岩壁を殴ってしまったらしく、指先が腫れ、爪の隙間から血が滲んでいる。

「……痛そう。動く？」

「こっちの手は無理ね。爪が剥がれちゃって、殴る力が入らないの」
細長い布を巻いて応急手当をしたが、爪がないと拳に力がこめられない。実質、片手を封じられた状態である。

「ちよつとみせて。消毒してあげる」

ラミーはリズの傷を見ようとして、ナイフを木の支柱に突き刺した。

「あら、このナイフ」

「どうしたの？」

「見て、人面蝶の鱗粉がくつついてるわ」

聖なるナイフの刀身が、おびただしい数の人面蝶の体液と鱗粉を帯びて、妖しく紫色に輝いている。

「さながら毒蛾のナイフね」

「これ、切れ味大丈夫なのかな……」

ともかく、変色したナイフを鞘へ収め、二人は怪我の手当てをした。

そうこうするうち雨がやんで、分厚い雲の切れ間から太陽が覗いた。

「風はまだ強いけど、行こう」

山の稜を見つめ、ラミーは目をすがめる。

雨上がりのぬかるんだ道を、二人は注意深く踏みしめるようにして歩き、勇者の足跡を追った。

×

「あれを見て！」

声を弾ませて、リズが指をさした。

泥濘の中に、四人分の靴の跡が残っている。はっきりとした痕跡なので、雨が降り始めてからのものであるのは間違いない。

「かなり近くまで来てるわよ」

「う、うん」

勇者との再開を想い、ラミーは声を上ずらせる。

果たせなかった約束を、ようやく今果たすことができる。

（会ったら、なんて言おうか）

ぐるぐると脳裏に想いの丈が渦巻く。

力の種を渡したことや、夜の森で命を救われたこと。勇者のやさしげな透き通った瞳と、十六の少年にしては落ち着きのある声。

（わたし、きつと……）

ドキドキと疼く胸をぎゅっと抑える。

泥に足を取られて何度も転びながらも、二人は助け合って這い上ってゆく。

さらに一時間半ほど歩いて七合目ほどの高さに到達すると、岩を切り出した人工的な広場へと到達した。

ちよつとした広場ほどの台地に、花崗岩の神殿のような建物がある。どこことなく、神秘的な厳かな雰囲気のある場所だった。

「ここがいざないの洞窟？」

二人は周囲を警戒しながら、洞窟の入り口へつづく石畳の柱廊を歩いてゆく。

「見て。勇者さまたちだわ」

「敵に襲われてる！」

どうやら魔法の玉を仕掛ける途中、敵に遭遇してしまったようである。

洞窟の周辺から、黒衣のローブを着た魔法使いたちが迎撃している。この一帯を根城とする邪教徒の集団だ。

勇者たちは円陣を組み、四方八方から襲い来る魔法使いたからの攻撃を防いでいる。

「メラッ！」

魔法使いたちがいつせいにメラを唱える。日頃、訓練しているのか阿吽の呼吸だ。

「くっ！」

勇者とバルダスが先頭に立ち、盾で魔法を受け止める。革の盾に次つぎと火球が命中し、二人の身体が炎上した。

「ほれ、ホイミ！」

デアゴが背後からホイミで加勢する。

マリエはヒヤドをあえて敵ではなく、味方へと打ち込んだ。氷の

刃が熱で解かされ、しゅうと水蒸気が立ちのぼる。

そのもうもつたる湯気を切り裂くようにして、得物を手にした勇者とバルダスが雄叫びをあげながら突進した。

「苦戦してるわ、助太刀しないと！」

ラミーはナイフを抜いて走り込むと、敵の背後から腰を刺した。

しよせんはナイフなので、致命傷には至らないものの、不意打ちで敵の動揺を誘うには十分だった。

「ぬお……」

背後から襲われ、魔法使いたちの隊列が乱れる。

ラミーは踊るような攻撃で、次つぎとナイフで切り傷をつくつてゆく。

たちまち三人に手傷を負わせた。

「ええい小癩な！」

至近距離からメラを撃とうとした魔法使いの一人が、うつとうめき声を洩らして屈みこんだ。毒蛾のナイフの追加効果で、神経系に作用する痺れ毒がまわったのだ。

「ラミー！」

勇者が驚愕の様子で叫んだ。

ヒヤドでぬれた水滴を飛ばしながら、華麗な剣技で敵を撫で切りにする。

「ほう、これはこれは」

デアゴがヒゲを撫でながら、にんまりとしてラリホーを唱える。

三人、四人と魔法使いたちは眠りに落ち、そこへバルダスが無言で鎖がまを振り下ろし、職人技的な正確さでとどめを刺した。

「さすがね」

リズは目を細めて勇者一行の戦いぶりを観察しながら、自らも無事な方の手で弱っている魔法使いに疾風突きを入れる。

素早く打ちこまれた拳は、溜めが少ない分一撃の威力では劣るが、相手に先んじて攻撃することができる。スペルユーザーが相手の場合、詠唱を潰せるのが大きな利点だ。

六人になったことで、二十人近く居た魔法使いの一団はみるみる壊滅し、残り数人となったところで蜘蛛の子を散らすようにして潰走した。

「追うか？」

無口なバルダスが珍しく口を開く。

「いや、よそう。それより、早くこの壁を爆破してしまわないと。遅くなると、連中が仲間を連れて戻ってくるから」

勇者は荷袋の中から魔法の玉につなぐ導火線を取りだした。バルダスとデアゴが、それを魔法の玉へとつなげる。あとは発破をかけるのみだ。

「あの、勇者さま……」

「ラミー、ずいぶん強くなったね」
「あ」

勇者に褒められ、ラミーは頬を染める。

初めて会ったときはまるで気にならなかったのに、今は勇者の顔を直視することすら恥ずかしく感じる。

「あの……薬草、持ってきたの。良かったら受け取ってくださいか」
「約束、だからね」

勇者は満面の笑みで薬草の束を受け取ると、代金を支払った。ラミーとしてはお金をもらいたくはなかったが、あくまで道具屋の店員見習いなのだから、代金を頂くのが道理だ。

「お、お買い上げありがとうございます」

「うん、ありがとね。助かるよ」

「あ、あのわたし、その……」

「どうしたの？」

勇者がきょとんとする。

「ふう、私らはお邪魔みたいね」

「そうね」

気を利かせて、リズとマリエがその場から離れる。

「どうしたのラミー？ お腹痛いの？」

「ち、違う」

思わず顔が真っ赤になる。

これではアリアハンで初めて会ったときの逆だ。

「……うん？」と首をかしげる。

ああ、へんに思われてしまった、とラミーはますます焦る。

……

……うん。

こうなった以上、結果がどうなろうと告白するしかない。

どうせ振られる身の上だ。

玉碎覚悟、自己嫌悪上等。失意絶望なんでもこい。

なんなら三日三晩、ベッドの上で思いだして身もだえたって構わない。

だから……

行け。

行くんだわたし。

告白しろ。

自らを強く鼓舞し、凜然とまなじりを決する。

「わっ、わたし、じつはゆう——」

ラミーが顔を真っ赤にして、もじもじしながら想いを伝えようとした瞬間、

ずっどおおおおおおおんツ！

鼓膜が破れるかと思うほどの、すさまじい爆発音がした。

デアゴが点火した魔法の玉が爆発したのだ。

「きゃあッ！」とリズが叫ぶ。

「ほっほう、これは爽快ですなあ！」

太平楽なデアゴは、爆音をもものともせずには笑った。

バルダスはしかめ面で耳を抑えると、亀裂の生じた壁を体当たりでぶち壊した。

がらがらと瓦礫が崩れ、封鎖されていた洞窟の入り口があらわとなる。

「……開通したね」

勇者はふう、と大きく息をした。

新大陸での冒険を思い、期待と不安で武者震いをしているのだ。そんな彼を見ているうち、胸を焦がす強烈な想いがずっと退くのを感じた。

ラミーはふう、と軽く息を整える。

「勇者さま、行つてらっしゃい」

自分でも驚くほど自然に、勇者を見送る言葉が飛びだした。

泣きそうになるのを必死にこらえて、旅立つ勇者を見送るためのとつておきの笑顔を見せる。

勇者は一瞬虚を衝かれたような表情を浮かべたが、すぐにたおやかに笑うと、

「はい。行つてきます」

芯のある声でそう返答した。

「魔王を倒して、必ず戻ってくるから」

「うん、信じてる」

ラミーはこっくりとうなずく。

そして洞窟の中へと消える勇者一行の背中を、ラミーはいつまでも見送ったのだった。

エピソード

レーベ村の風景を思い浮かべながら、キメラの翼を放り投げた瞬間、身体がふっと軽くなった。

（身体が浮いてる！）

見えない力に包まれ、ラミーとリズは空高く舞い上がった。

上空の身を切られるような寒さを感じたのはほんの一瞬で、次の瞬間、レーベ村の入り口にふわりと着地した。

「……すごかったね。キメラの翼って、こんな簡単に移動できるんだねえ」

「し、死ぬかと思ったわ」

感動するラミーとは裏腹に、リズは真っ青だ。

意外と空を飛ぶのはお気に召さなかったらしい。途中で落ちるんじゃないかと、びくびくしっぱなしだったそうである。

「アリアハンへは陸路で戻るわ。空を飛ぶのはもうたくさんよ」

「わたしも道具屋の手伝いが終わったら、一度お母さんのところへ顔出さないとなあ」

もとはと言えば、母親に家から追いだされて始まったささやかな冒険の旅だ。

一段落ついたら、報告しに行くのが礼儀である。

「けど、良かったの？」

「何が？」

「勇者さまに気持ちを伝えなくて」

「いいよ。勇者さまは、これから世界を救う人なんだから。わたしなんかが余計なこと言って、変に気を遣わせるのは迷惑だもん」

「ラミーは、まだまだ遠慮しすぎね。そういう消極的などこ直した方がいいわ」

「リズこそ、結局一緒に行かなかったんだから、おんなじくらい消極的じゃない」

ラミーがまぜっかえすと、

「あたしはあたしの道に行くことにしたの。勇者さまと魔王討伐はできなくても、あたしなりに誰かの役に立てる仕事をしたいわ」

リズは開き直ってそう胸を張る。

「あと、今すぐは無理でも、いつか大陸の方へ行ってみたいわね。

イシスやポルトガ、ジパングなんかの異国を見てまわるの。武者修行かつ、諸国漫遊みたいだね」

「そのときはわたしも一緒に行きたいな」

「もちろん大歓迎よ。マリエも入れて、三人であちこち旅しましよ
うよ」

リズは浮き浮きした声で言った。

気の合う仲間たちと、一緒に世界各地を旅してまわる。

平和の訪れた世界なら、そんなことだって可能なのだ。

それはどんなに楽しく、心躍る旅だろうか。

想像するだけで胸が期待に膨らんだ。

「ワクワクするね」

「ワクワクするわね」

ラミーとリズは近い将来の新たな旅立ちを想い描き、微笑みを交わし合った。（一部完）

あとがき

初めまして。

草木刈と申します。

途中、幾日か日が空いてしまいましたが、まずは無事に完結できてほっとしています。

小学生の頃に久美沙織先生の『ドラゴンクエスト4 導かれし者たち』のノベライズを読んで以来、自分もドラゴンクエストの世界を舞台にした二次創作を書いてみたい、と常づね思っていました。

勇者の活躍の裏で、こんな風にささやかな冒険が行われているんじゃないか、などと妄想を逞しくしながら書くのは、仕事のつらさを忘れるくらい楽しい作業でした。

ドラクエ3は十年近く前にプレイしたきりなので、記憶を頼りに書いている部分も多く、間違っている箇所も多々あるかと思いますが、なにとぞご容赦ください。

最後になりましたが、拙作にここまでお付き合い頂き、誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0018u/>

薬草8G

2011年10月18日03時40分発行